

センター研究年報2013



京都大学人文科学研究所附属
東アジア人文情報学研究センター

特集 科学史研究室所蔵資料データベース（武田時昌編）

- 科学史研究室デジタル・アーカイブの構築
- 科学史研究室所蔵資料選
 - (1) 藪内清筆録『編暦法講義』（昭和15年・17年）
 - (2) 森立之等編『本草経集注』第2次稿本
岡西為人編『重輯新修本草』自筆草稿
- 人文研アーカイブス(20)
『史記正義佚存』（瀧川龜太郎博士手録）

目 次

第Ⅰ篇

科学史研究室デジタル・アーカイブの構築	武田 時昌	3
【附録】科学史文庫リスト キャビネット収蔵資料（東郷俊宏・平岡隆二作成）		

第Ⅱ篇 科学史研究室所蔵資料選

(1) 藪内清筆録『編暦法講義』（昭和15年・17年）		
【解題】隠れた偉才の天文学遺産	宮島 一彦	20
(2) 森立之等編『本草経集注』第2次稿本		
岡西為人編『重輯新修本草』自筆草稿		
【解題】古本草書の復原と中国環流現象	武田 時昌	25
【特別寄稿】		
人文研科学史家略伝(1)～(3)	森村 謙一	32

第Ⅲ篇 人文研アーカイブス(20)

『史記正義佚存』（瀧川龜太郎博士手録）	小澤 賢二	37
【特別寄稿】		
『唐張守節史記正義佚存』手稿之文献価値（抄録）	袁 傳璋	43

科学史研究室デジタル・アーカイブの構築

武田 時昌

1

東方学研究部の科学史研究室は、東方文化学院の天文暦算教室以来、国内外の科学史家が多数集まり、東アジア科学史、技術史研究の国際的拠点として活動してきた。研究室には、共同研究会の訳稿、発表資料などの配付資料、成果報告論文集の草稿のほか、会読用に常備した図書、寄贈書などの図書未登録の研究書、あるいは調査写真、複写物、目録類、論文抜刷、書簡など様々な研究資料を多数保管している。

研究室は、北白川にある分館（東方文化学院設立時の建物で、元々こちらが本館）にあるが、この建物は、筆者が人文研に転任してきた翌年の1996年度に、大規模な改修工事を行った。研究棟の内装も全面的に一新するために、研究室を一時的に引っ越しすることになり、科学史研究室内にあった資料をすべて梱包した。その際に、破損して保存状況の悪いものや不要と思われるものは一部破棄したが、それまで雑然と放置されていた資料を類別的に整理した。作業に当たったのは、当時の助手だった新井晋司氏である。蔵書には、理学部宇宙物理教室の図書ラベルが附された洋書や図書カードでは廃棄処分になっている書物、あるいは未登録の図書などがいくつか含まれていたため、移管の手続きを行ったり、新たに登録したりして、人文研の蔵書に加えたものがある。新装された部屋に戻った時に、段ボールのなかにこのまま眠ったままにしておくのは勿体ない気がして、所蔵資料の目録化をスタートさせた。その後、部屋の前に置いて利用していた資料キャビネットに保管されていた資料について、助手に着任したの東郷俊宏氏に依頼して整理を試みた。2000年6月に藪内先生が逝去された時に追悼集会を催し、著作目録を作成したことを契機に、共同研究会の訳稿、歴代スタッフや研究会に参加されていた先生方に関する研究情報をファイルにまとめていく必要性を感じ、本格的な整理を始めた。

その整理作業を通して人文研の蔵書にちょっとした「盲点」がいくつもあることに気づいた。藪内清先生の『中国の天文暦法』（平凡社、1969）を例に挙げると、その増補改訂版が1990年に出版されている。その訂正チェックや補注作成は、同志社大学の宮島一彦氏が協力したもので、補遺や付録が追加され、大幅な増補がなされているが、研究所の書庫には初版本しか入っていない。人環の図書館には増補改訂版だけが入っていたが、朋友書店に問い合わせると品切れで絶版になっている。また、身近な先生方について調べてみると、坂出祥伸著『中国の思想と科学』（初版：同朋舎出版、1983、改訂増補版：朋友学術叢書、朋友書店、2001）や中村璋八著『日本陰陽道書の研究』（初版：汲古書院、1985、増補版：同上、2000）も同様で、学内図書館に初版本はあっても、増補版はどこにも見当たらない。図書館側は重複して図書を購入することを嫌うこともあって、増補版はうっかりと購入しそこねる傾向がある。そこで、古本屋を探し回って、研究室の常備本に加えることにするとともに、古くから研究会に参加されている方々に研究資料の提供を申し出た。

藪内先生の著書に関しては、2010年4月に藪談会（藪内先生を偲んで毎年、先生の命日近くに集う追悼集会）のメンバーで奥様の一周忌に献花を捧げた時に、奥様が最後までそばに置かれていた先生の著書や遺品をご遺族から一括して寄贈してもらった。表紙の写真は、献花をお届けした長女の中山忠子さんが最もお気に入りだった「漢代司南模型」（スプーンが司南針（磁石）になっている方位盤）である。その他に、コペルニクス（2個）・杉田玄白・緒方洪庵の記念メダル等がある。

それより少し前のことになるが、2005年4月に研究会に長年参加されていた村上嘉實博士が亡くなられた時には、ご遺族の依頼で書斎の書架を整理し、線装本については宮島一彦氏を通じて同志社大学に購入してもらったが、その時に研究会関連の資料や雑誌類を科学史研究室に寄贈してもらった。また、岡西為人、赤堀昭両氏の後を継いで塩野義製薬研究所で漢方を研究され、山田研究班に参加されていた櫻井謙介氏からも医薬学関連を中心とする書物、雑誌や会読資料を数多く提供していただいている。さらに、後述するように、山田慶兒、小澤賢二をはじめとする諸氏からの寄贈書、寄託資料が多数寄せられている。

科学史研究室は、2008年5月における本館の本部構内移転と2009年4月の東アジア人文情報学研究センターへの改組によって、分館北側の部屋（旧宗教学研究室）に移動した。その後、2012年度に再び耐震改修工事を行ったために、1年以上の期間立ち入り禁止状態になったが、2013年の春になってようやく改修工事が終わり、研究室に自由に出入りできるようになったので、中断していた研究室内の資料整理作業を再開させた。そして、代々受け継がれてきた研究資料を大切に保管するとともに、これまで作成したデータベースをさらに充実させて科学史研究室のデジタルアーカイブを構築し、IT時代に順応した研究拠点として機能するための環境整備に本腰を入れることにした。

2

科学史研究室が所蔵する研究資料を大別すると、次のようになる。

- (1) 天文暦算学関係資料
- (2) 医薬学関係資料
- (3) 伝統技術関係資料
- (4) 術数学関係資料

各資料の整理中なので、全リストは未完成であるが、主な資料についてリストアップできたので、以下に概述しながら、各資料の由来についてわかっている範囲で記録しておく。

(1) 天文暦算学関係資料

東方文化学院京都研究所の創立時に設置された天文暦算教室以来の伝統を受け継いでおり、理学部宇宙物理教室の新城新蔵博士門下の俊英達がここに結集し、継続的に共同研究を推進してきた。だから、人文研の書庫には天文暦学関連の和漢書や研究書はきわめて充実しており、研究室内にも戦前からの資料が多数残されている。

戦前の資料でまとまっているものとしては、能田忠亮、藪内清両博士を中心に推進していた東洋暦術調査、とりわけ新東亜暦編纂に関する資料である。それらについては、研究室助手だった東郷俊宏氏（現東京有明医療大学准教授）が『漢字と情報』No.7に紹介文を載



せており、転出後に2005年度～2007年度科学研究費・萌芽研究の「戦時下の中国における新東亜暦編纂事業に関する基礎的研究」等のプロジェクトを立ち上げて、さらに詳しい調査研究を行っている。東郷氏の報告によると、主要な資料は以下の通りである。

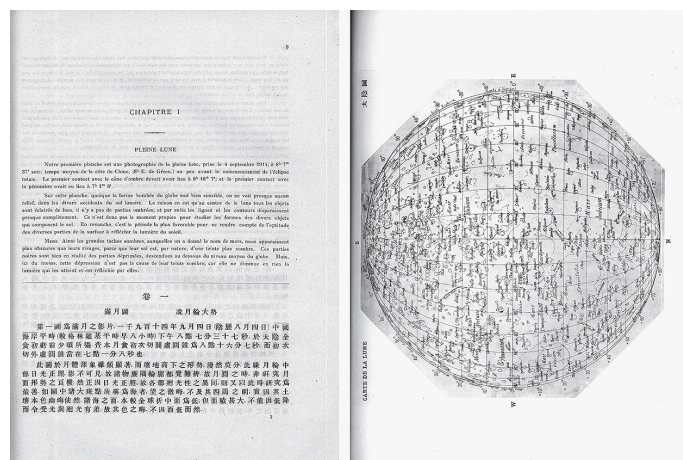
- (1) 能田忠亮への招聘状（昭和15年9月に南京において開催された国民暦編纂会議に招聘）
- (2) 同会議の議事録や会議開催前後に掲載された新聞記事
- (3) 能田忠亮宛に送られた書簡（新東亜暦編纂事業に関わっていたと思われるメンバー（高木公三郎、藪内清、森川光郎等）との間に交わされたもの）
- (4) 紫金山天文台修復事業の書類（「紫金山天文台復興事業経過概略」「民国三十年国民暦編纂委員会会議録」など）

東郷氏は、それらの翻刻を試み、現在は最終的な校合を行っている段階である。

資料キャビネットには、段ボール4箱分の研究資料があった。東洋暦術調査関係のほか、戦前のガリ版・手書きの目録類があり、藪内清先生が教授、吉田光邦先生が助教授でおられた時代のものと思われる資料や写真・ネガ類が多数ある。内容的には、蘭学、伝統技術、医薬学及び（藪内先生のもとに寄せられた）抜刷類である。その一群の資料は、東郷氏が平岡隆二氏（現熊本県立大学准教授）の協力を得て作成した目録データベースがある。未定稿であるが、写真、ネガ類を除く目録データベースの題目の部分を附録として後に抄録する。

抜刷に関しては、研究室には山田慶兒先生からも研究資料としてご提供いただいたものがある。班員が研究会で配布した保存分や筆者のもとに送られてきたものを合わせると、かなりの分量になる。山田慶兒先生には、自宅書庫から研究所の蔵書にない稀覯書を時折寄贈していただいている。天文学関係では『太陰図説』が出色である。著者は、フランスの耶蘇会宣教師で天文学者の蔡尚質（Stanislas Chevalier, 1852-1930）。彼は、清末の光緒9年（1883）に上海にやって来た。1899年の佘山天文台建設の中心人物で、初代天文台を務めた。そこには、アジア最大の望遠鏡が設置され、それを用いて月（太陰）を観測した記録が本書である。原書（“*La lune et ses paysages en 14 planches: Photographies prises à l'Observatoire de Zô-sè*” 1922）はフランス語で書かれたが、弟子の高均（震旦大学院教授）が漢訳したもので、上段に仏語文、下段に漢文を併記する（右図参照）。なお、その望遠鏡は、現在は上海自然博物館にある。

天文学史研究者の小澤賢二氏からも、多くの寄贈書をいただいている。2009年1月に『東洋天文学史研究』抜刷合冊本（抽印本、巻1のみを欠く）の寄贈依頼を受けたのがその始まりである。というの



『太陰図説』

左が第1章目頭（p. 3） 右が「太陰図」として掲げる月面図

は、それが新城新蔵が飯島忠夫に謹呈した別刷であり、小澤氏の文面をそのまま借りれば「特に新城に対する飯島の反論や疑問がペンあるいは鉛筆にて「書き入れ」られているために、史料的価値が高く、両氏に関する論争の本質を知る上で極めて高い価値を有すると考えられる」から、新城新蔵に縁の深い人文研科学史研究室に「返却」したいとのことであった。本資料は、長野市松代町の飯島家から古書肆に流出したものである。小澤氏は、『東洋天文学史研究』第8篇「戦国秦漢の暦法」を長期間に渉って捜索中であったそうで、その古書を購入して飯島忠夫旧蔵資料であることに気づき、さらに能田忠亮「夏小正星象論」、藪内清「殷周に隋に至る支那暦法史」「宋代の星宿」などの昭和10年代に『東方学報』京都に掲載された論文の謹呈抜刷等が店にストックされていることを発見し、一括して購入したようだ。両氏の激しい論争は有名であるが、互いに研究交流があったことを物語る史料であると考えれば、とても興味深い。そこで、新城門下の結集する人文研科学史研究室に寄贈することを思い立ったのである。小澤氏によって作成された追加購入分を含む寄贈リストをここに転載しておく。

- (1) 新城新蔵による一連の謹呈抜刷（抽印本）。飯島忠夫による批判的な書き入れが存在する資料群。抽印本に綴じ込まれていた関連史料も含む。
- (2) 飯島忠夫が旧蔵していた飯島論文の抜刷（抽印本）などの資料群。抽印本に綴じ込まれていた関連史料も含む。
- (3) 藪内清による謹呈抜刷（抽印本）「殷周に隋に至る支那暦法史」（『東方学報』京都第12冊第1分冊別冊，昭和16年6月）と「宋代の星宿」（同上第7冊抜刷，昭和11年9月）
- (4) 能田忠亮による謹呈抜刷（抽印本）「夏小正星象論」（同上第12冊第2分冊，昭和16年）
- (5) 宮崎市定による謹呈抜刷（抽印本）「賈似道略伝一支那古今人物略伝」（『東洋史研究』第6巻第3号抜刷）
- (6) 諸橋轍次による謹呈抜刷（抽印本）「避諱攷」（『倫理教育研究』第7巻第24号抜刷）

その後、小澤氏は、共同研究者の仲間入りするようになり、寄贈してもらう書物の数も増えていった。そのなかで特筆すべきものが2つある。1つは、小澤氏が齊藤国治氏と編集した『中国古代の天文記録の検証』（雄山閣出版，1992）の第1次，第2次稿本。1つは、瀧川龜太郎博士手録の『史記正義佚存』。後者は、科学史研究室で私蔵するのは宝の持ち腐れになるので、昨春に人文研の図書として登録し、分館の貴重書庫に入れた。近々、センターの東方学デジタル図書館で公開するはずである。その史料的価値と入手経緯は、本誌，第3編の人文研アーカイブス(20)に小澤氏自身が語っており、また彼の朋友である『史記』研究の専門家、袁傳璋氏（安徽師範大学教授）に寄稿してもらった解説文を参照していただきたい。

(2) 医薬学関係資料

科学史研究室では、共同研究班で馬王堆出土医書や『黄帝内経太素』『医心方』等を会読してきたので、医学、本草学などの方面の研究資料を蒐集している。そのなかで最も注目度が高いのは、何と言っても岡西為人博士が所蔵されていた森立之等編『本草経集注』第2次稿本及びご自身のライフワークである『重輯新修本草』編纂時に用いた自筆の草稿



であろう。両書ともに影印本が出版されているので存在はよく知られていたが、原本の消息はわからなかった。それが研究所に寄贈された経緯を簡単に記しておくと、2008年1月末に茨城大学の真柳誠氏から岡西為人博士の遺品についての相談メールが舞い込んだ。『宋以前医籍考』の中国再版のために、岡西博士のご遺族を訪問した時に、先生の遺品が段ボール箱に1つあり、その寄託ないし譲渡先を紹介して欲しいと依頼されたとのことである。中身はなんと「復元『新修本草』ほかの原稿及び諸記録・ファイル、森父子・小島尚真らが復原した『本草集注』の稿本」と記してある。『本草集注』7冊は、真柳氏の見立てでは「数百万円は確実で、最大500万以下」という貴重書である。しかも、ご遺族は金銭は一切不要で、一括して保管し、将来に研究利用してくれる機関を希望されているとのことだった。そこで真柳氏は「京都付近となると、第1は京大人文研、第2は杏雨かな」と思い巡らせて、有り難い話を持ちかけてきてくれたのである。

岡西博士が戦後3年後に中国から引き揚げて帰国する際に、抱きかかえて持ち帰った愛蔵品である。そんなお宝がまさかタダではと半信半疑だったが、すぐに返事をして寄贈先の名乗りを上げた。そして、真柳氏の仲介で2008年4月20日午後岡西為人著『宋以前医籍考』の再版を手掛けた郭秀梅女史とともに京都山科の岡西克人氏（岡西先生の次男）の邸宅に出向くことになった。杏雨書屋や日文研ならすぐ買い上げることができるが、人文研にはそのような資金力はまったくない。だから、貴重な資料を拝見するだけでもいいと思ってお邪魔したのであるが、岡西克明・松子ご夫妻にはにこやかな微笑みとともに人文研への寄贈を快諾していただいた。藪内清博士が主宰する科学史研究会に「毎月きまった曜日に父が楽しみにして出かけておりましたのを覚えておりますし、藪内先生をはじめ、おなじみ深い先生方のお名前もよく伺っておりました」とおっしゃられ、骨董的な貴重品として書庫に納められてしまうより研究資料として活用してもらえ場所を探していたので、「ちょうど父が亡くなりまして、今年で35年になりますが、こういう形でお納めすることができて、同学の方々のお役にいくらかでも立つことになれば、故人もさぞ満足なことだと思います」と喜んでくれた。

研究所に持ち帰って、さっそく張杲『医説』を会読していた科学史読書会メンバーを集めて作業部会を立ち上げ、保管のための整理と写真撮影などを行った。主要メンバーは、植物学、本草学の専門家である森村謙一氏、岡西博士が帰国後に勤めておられた塩野義製薬研究所の櫻井謙介氏及び薬大出身で東洋史の修士課程に在学していた蓑輪圭一郎氏（現薬剤師）である。森村謙一氏は、理学部植物学教室の北村四郎博士の弟子で、科学史研究会の班員に加わったのは、昭和40年代初頭に「宋元時代科学技術史の研究」班の末期である。当時の参加メンバーは、篠田統、岡西為人、天野元之助、北村四郎、今井湊、宮下三郎等々の錚錚たる先生方でであった。また、当時からの班員であり、現在の術数学研究会（武田時昌主宰）にも参加されている方々には、森村氏のほかに坂出祥伸関西大学名誉教授、相川佳子奈良女子大学名誉教授がいる。今回のアーカイブ作成事業では、その三氏にいろいろとご教示いただいている。森村氏は、毎回欠かさず参加されるとともに、研究発表や論文執筆も精力的に行われており、本誌にも岡西為人、北村四郎、篠田統に関する記事を寄稿いただいた。

また、櫻井謙介氏は、もともと現代薬学の研究者であったが、古書肆を巡り歩く本の虫であることを見込まれて、初代の岡西為人、2代目の赤堀昭両氏の後継者に指名された方で、『太素』の研究班（班長：山田慶兒教授、テーマ：「中国古代の科学」）には巻10あたりからの参加である。毎週火曜日に開催された研究班では数多くの配付資料があり、それをファイルにして綴じるのは面倒なことである。その整理能力の高さは、科学史研究班では櫻井氏が宮島一彦氏と双璧の存在であり、両氏の資料ファイルによって1980年代以降の人文研の医薬関係と天文暦法関係の研究資料の大部分が揃うと称しても過言ではない。

櫻井ファイルの場合には、研究会終了後に杉立義一、高島文一両氏を中心とする医心方読書会が行われていたが、『太素』『医心方』の訳稿ファイルは最初からすべて完備しており、しかも手製の和綴じ冊子になっている。また、岡西為人、渡辺幸三、赤堀昭等々の本草研究家の業績資料も博搜されていて、フラットファイルにまとめられている。それらの資料は、一括して研究室に寄託してもらった。所蔵する医薬学関係図書も人文研書庫以上に充実しているが、残念なことに昭和薬科大学に寄贈するという先約があるとのことである。それでも、岡西為人著『本草概説』をはじめ、数多くの研究書を若手研究者のためにとプレゼントしていただいていた、とても有り難い。また、研究所には伝統医学関係の雑誌はほとんど購入していなくて困ることがしばしばある。その話をしたら、「漢方の臨床」所蔵分1セットをボンと寄贈してもらえたのでとても重宝している。

ところで、段ボールのなかには、故勝村勝也氏が作成した『太素』本文及び楊上善注の一字索引ファイルがある。大型計算機センターのコンピュータを利用して電算処理したもので、ドットプリンタ用の大きな連続用紙にプリントアウトしたものである。その索引データベースは、平成9年（1997年）4月に大型計算機センターが総合情報メディアセンターに改組されたこともあって紛失してしまったが、原テキストだけは磁気テープのドラムに残存しているのが見つかり、麥谷邦夫氏の協力で復原させることができています。

1985年以降に釈文が発表された馬王堆医書や『太素』は、研究会での訳稿が未整理のままになっている。当時は手書きだったので、馬王堆医書に関してはすでにパソコン入力し、読み直しもほとんど終えたが、『太素』に関しては分量が多いので1人では手に負えない。「医道の日本」2012年7月号の連載コラム「鍼灸パラダイム」で研究室所蔵の『太素』資料を紹介し、Web上にアップする作業の協力者を募ったところ、今年に入ったばかりに高松の松木宣嘉氏（四国医療専門学校教員・経絡治療学会うたづ部会）を中心とする有志が手伝ってもいいと賛同のメールをくれた。志のある鍼灸師の向学心と意気込みで俄然やる気が出たので、今春から読解作業部会を立ち上げる運びになった。岡西先生をはじめとして寄贈者の方々のご厚意を無にしないように、今後研究を志す者が活用できる環境を整えていきたいと考えている。

（3） 伝統技術史関係資料

技術史の分野は、古くは『斉民要術』、近年では田中淡博士が『王禎農書』農器図譜、『通雅』巻38、宮室の会読を行ってきた。『斉民要術』は訳稿が仕上がった時に、西山武一・熊代幸雄訳の出版（アジア経済出版会、1969）が先行していることを知り、参考資料としてその草稿を提供したという有名なエピソードがある。そのガリ版原稿は、書棚に大切



に保管してある。また、『王禎農書』農器図譜も研究会で会読を終えた後に、班長の田中淡博士が東海大学の渡部武氏、愛弟子の福田美穂（現大阪市立大学准教授）、高井たかね（現人文研助教）両女史を中心して研究会訳稿を電子化しながら、読み直しを行って出版する計画を立てていた。しかし、退職後に急逝されたために、未完に終わっている。田中淡博士は、退職の時に、人文研新館竣工図、分館図面、傳熹年元大都宮殿復元図などの入った長い筒5個を研究室に置いておかれた。また、調査で撮影した大量のスライドを入れたボックス型ファイルを研究室にそのまま置いておかれた。それらの翻訳の完成や建築、造園関連の資料データベース作成も我々に遺された宿題である。

伝統的な技法に関する研究は、かつては吉田光邦博士が主導された調査プロジェクトがある。吉田博士は、東方部から日本部に所属を移されたが、科学史研究室にもいくつかの資料を見出すことができる。そのなかで異彩を放っているのは、スクラップブック10冊である（右図参照）。表紙に所有者の名前はないが、貼られた写真の下に1950年代前半の日付が所々に書かれており、「吉田撮影」と明記するものもあるので、間違いなく吉田光邦博士の遺品にちがいない。

10冊の裏表紙には、次のような標題が記されている。

- (1) 丹生祭，下津具，中在家，曾川，上・下黒川，北野万燈会
- (2) 鑄造過程，瑠璃寺・近江尾上・倉敷・姫路城・生野銀山・上畠神社・信楽・海南漆器
- (3) 白子染型紙
- (4) 洋傘地見本帳 染出係
- (5)(6) 菓子商標（Ⅰ）（Ⅱ）
- (7) 科学史年表
- (8)～(10) 新聞切抜帳（Ⅰ）（Ⅱ）（Ⅲ）

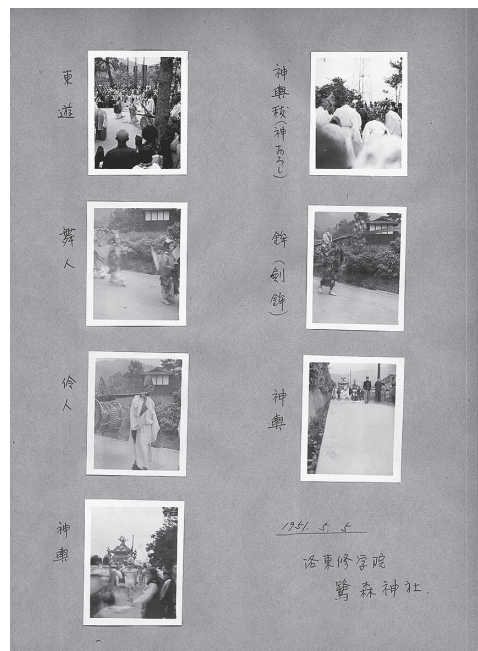
(1)(2)には、寺社の祭事、民家の町並み、鑄物・漆器の製作過程など、日本各地の調査に出かけた時に撮影した白黒写真や製品サンプルが整理された形で貼られている。さらに洋傘の製造風景や生地見本、菓子商標のコレクションに至るまで、伝統的な技術・芸能のワザと知恵を独自の視点で描き出そうとする吉田ワールドの



上段右：スクラップブック(3) 白子（三重県鈴鹿市）に伝わる染色用の型紙（白子型紙、伊勢型紙）の製作工程

上段左：スクラップブック(4) 洋傘地の見本

下段左右：スクラップブック(5)(6) 菓子商標コレクションの一部



吉田光邦博士のスクラップブック(1)

1951年5月5日に京都市左京区修学院の鷺森神社で行われた例祭（通称、さんよれ祭。4日に宵宮祭，5日に神幸祭を行う）を撮影した写真集

多元的時空が広がっている。しかも、資料をじっくり眺めていると、鋭い観察眼が随所に垣間見られ、比類無きマルチな才能を発揮された先生の偉大さが今更ながら偲ばれる。

なお、2012年3月に横山俊夫教授が定年で退職される時に、研究室に保管されていた段ボール1箱分の吉田光邦博士資料を筆者に託された。箱のなかには、「大堀相馬焼製造及び技法工程書」（福島県双葉郡浪江町）、「京扇子・京うちわ」などの設計図や製作工程を記した図面とともに西京染の反物が入っていた。京都府立総合資料館の吉田文庫に加えようとして打診したがうまくいかなかったそうで、科学史研究室で預かることにした。

（4）術数学関係資料

術数学は自然科学と易を中核とする占術とが複合した中国特有の学問分野であり、東アジアの伝統科学文化の総体を構造的に把握するには、その領域に考察のメスを入れなければならないとして、筆者は共同プロジェクトを推進している。この研究班の狙いは、科学技術の発展史に力点を置くのではなく、自然探求によって生み出される科学思考の発揮の場を明確にし、世俗に広く浸透し、教養の基盤となった科学知識の諸様相を探ろうとするものである。天文占、俱注暦、煉丹術、鍼灸医術は言うまでもなく、易関係で言えば近世に流行した断易（五行易）、推命術などの種々の占術、呪術的行為に類別されてしまう療法や民間薬等々にもスポットを当てている。したがって、創造的な発明、発見に乏しく、孫引き、二番煎じ、または卑近な内容のため、これまで科学史研究の対象外であった俗書であるが、庶民によく読まれ、科学知識の伝達の啓蒙的役割を担った亜流、傍流の典籍を考察の俎上に取り上げており、科学と占術の境界領域における風変わりな資料群を蒐集している。また、近年に発見された簡帛資料にも、黎明期の科学文化に関する有益な情報があるので、日書を中心に資料や研究書も精力的に揃えている。会読では、『五行大義』『医心方』に加え、『春秋繁露』『靈憲』『敦煌宅経』『医説』『卜筮元龜』『物理小識』等々を読解しているので、これまでの共同研究とは方向性の異なるアーカイブを補うことができるように思われる。研究会のメンバーに中村璋八博士から蔵書の整理を依頼された時に発見した『五行大義校註』稿本が研究室にもたらされたことを附言しておきたい。

また、鍼灸医術、漢方薬に関するワークショップをたびたび開催していて、『医心方』を伝えた半井家の傍流である京都の半井家、大正末から昭和前期に漢方復興運動の火付け役となった中山忠直のご遺族から貴重な資料を寄託書として預かっている。研究所の書庫にやや欠けている中国数学、和算関係の研究書も、部屋には多数あり、なかには筆者の私物も含まれている。それらを合わせ、術数学研究会で活用した文献資料は、筆者が研究所を去った後もそのまま研究室に置いていくつもりである。今後研究所の将来がどのようになるかは予見できないが、東アジア科学史研究の資料庫としてのハブセンター的役割は受け継いでいってもらいたいと願うばかりである。

なお、以上で紹介した一連の資料は、東アジア人文情報学研究センターの事業の一環として、科学史文庫と名づけてデータベース化し、整理が済んだものから順次 Web 公開していく予定である。現物の閲覧、利用を希望される方は、研究室の主任教授である筆者までご連絡いただきたい。（人文科学研究所教授）

【附録】

科学史文庫リスト キャビネット収蔵資料

東郷 俊宏・平岡 隆二

(※ 未定稿 作成, 原題「仮称蔵内文庫」, 写真・ネガ類を除く)

〈目録類 (ガリ版・手書き)〉

天文暦算論文目録 (其一)

天文暦算論文目録 (其二)

京都大学図書館蔵和漢書分類目録第二 昭和12年末現在理学ニ属スルモノ

天文暦算史研究室所蔵和書目録 昭和15年5月現在

東洋暦術調査事業購入図書 昭和15年度

東洋暦術調査事業購入図書追加 昭和15年度

東洋暦術調査事業購入図書 昭和16・17・18年度

広島文理科大学蔵中天文暦術書目録 昭和17年5月

内閣文庫図書第二部漢籍目録 大正3年12月発行

彰考館図書目録 大正7年11月5日発行

神宮文庫図書目録 大正11年3月印行。同増加目録第二冊

静嘉堂文庫漢籍分類目録 昭和5年12月21日発行。同追加之一, 同統(松井文庫本) 昭和14年5月15日発行

京都図書館和漢図書分類目録 昭和6年3月発行

尊経閣文庫漢籍分類目録 昭和9年3月25日発行

岩崎文庫和漢書目録(東洋文庫) 昭和9年12月発行

小田切文庫目録(東洋文庫) 昭和13年5月発行

金沢文庫古書目録 昭和14年5月発行

帝室和漢図書目録(宮内省図書寮) 大正4年12月現在

京都帝国大学数学教室 和書現品調査録 昭和13年度

東北帝国大学図書館蔵 旧志村恒憲蔵書 昭和17年5月4日写 5月15日カード記入済

東北帝大蔵書(購入及び寄贈を含む) 旧名取蔵書ヲ含ム 昭和17年5月写 5月27日カード記入済

東北帝国大学岡本則録旧蔵書 昭和17年6月2日 カード記入済

林文庫(写本ノミ) 昭和17年6月9日 カード校合済

遠藤利貞の断片を岡本則録が編纂せる机前玉屑卷四抜記 支那の暦算書に限る 昭和17年5月写

千葉県立図書館編房総算家調査資料ノ中 花香安精蔵書並著書目録 昭和17年5月5日写

田中鉄吉氏蔵書(金沢市下柿木島十五) 昭和17年5月田中氏自作目録ヨリ転写 6月2日カード記入済

財団法人高樹会石黒信由蔵書 昭和17年5月5日写 6月1日カード記入済

岩瀬文庫図書目録 昭和17年5月写 6月3日カード記入済

帝国学士院日本科学史編纂費購入(天文書ノミ) 昭和17年5月4日写 6月2日カード記入済

帝室和漢図書目録(大正5年12月宮内省図書寮) 昭和17年5月写 6月1日カード記入済

名取三郎氏寄贈東北帝大蔵書 昭和17年5月写 5月15日カード記入済

神宮文庫図書目録(大正11年3月印行神宮司庁)抜記 昭和17年5月写

九州帝国大学蔵書 昭和17年5月写 6月1日カード記入済

明時館書目(東北帝国大学所蔵本ヨリ写ス)

明治文献目録

朝鮮図書解題(大正8年3月朝鮮総督府)抜記

天文暦書目録 林文庫刊本部 昭和17年6月18日校合スミ

暦算書目一覧 刊本 下(林文庫中ノモノ, 著作者不明) 昭和17年5月写 6月3日閲覧 ✓印 所在不明書

天文暦書刊本目録 年代順 昭和17年5月写 東北大数学教室カードより写す 6月18日校合スミ

天文暦書目録 写本之部(所蔵場所検出ハカードニヨルコト) 昭和17年5月写東北大学数学教室カードより写す

6月12日照合済

東北帝大で写本せしめた朝鮮本目録

伝記 東北帝大総目録中 昭和17年6月写

砲術書 東北帝大総目録中 昭和17年6月写

測量書 東北帝大総目録中 昭和17年6月写

狩野亨吉氏旧蔵書目録抄

学士院残本中の天文暦書目録 昭和16年9月調

学士院残本中の天文暦書目録 昭和16年9月調

学士院残本中の天文暦書目録 昭和16年9月調

井本文庫和本目録

続井本文庫和本目録

羽間文庫蔵書目録

大神重遠・大神垣守両先生書牘之中、天文に関する部抜萃 抛櫃谷龍吉氏蔵書写之 昭和17年4月写

天文暦算書総目録中 天文歴書（全部殆ど彰考館蔵書ナリ） 昭和17年6月写

彰考館図書目録

大谷大学

私有図書の中他に余りなき書物の目録（神田） 昭和17年9月

尊経閣文庫

高知市 山内家所蔵

和書目録 昭和16年11月調

朝鮮天文書

東北大学岡本文庫 附岡本則録の伝記〔平山諦編 昭和44年10月4日〕

蘭書目録〔調査者：宗田一・中野操 34部 調査地：安田龍夫・小石秀夫及蔵書 1962〕 ※ 調査メモ

蘭書目録〔調査者：井上忠 52部 調査地：久留米図書館・大分図書館・九州大学ほか 1962〕 ※ 調査メモ

〔蘭学関係資料写真 天文観測・医療器械17点〕 ※ 調査メモ

〈蘭学関係〉

蘭学関係資料調査依頼の件

蘭学関係資料の件回答 熊本県水俣市立洪水文庫

蘭学関係資料の件回答 長崎県島原市立島原公民館

蘭学関係資料の件回答 鹿児島県川辺郡知覧町郡知覧町立図書館

蘭学関係資料の件回答 福岡県田川郡方城町立図書館

蘭学関係資料の件回答 福岡県飯塚市立図書館

蘭学関係資料の件回答 宮崎県日南市立図書館

蘭学関係資料の件回答 鹿児島県肝属郡根占町立図書館

蘭学関係資料の件回答 阿久根市立図書館

蘭学関係資料の件回答 大分県速見郡日出町立万里図書館

蘭学関係資料の件回答 宮崎県児湯郡高鍋町 町立高鍋図書館

蘭学関係資料の件回答 財団法人天草図書館

蘭学関係資料の件回答 鹿児島県日置郡金峰町立図書館

蘭学関係資料の件回答 大分県白杵市立図書館

蘭学関係資料の件回答 鹿児島県大口市立図書館

蘭学関係資料の件回答 鹿児島県立図書館奄美分館

蘭学関係資料の件回答 宮崎県小林市立小林図書館

蘭学関係資料の件回答 佐賀県多久市立図書館

蘭学関係資料の件回答 鹿児島県揖宿郡喜入町立図書館

蘭学関係資料の件回答 長崎県立長崎図書館

蘭学関係資料の件回答 鹿児島県日置郡市来町公民館

蘭学関係資料の件回答 鹿児島県日置郡東市来町図書館

蘭学関係資料の件回答 宮崎県都城市立図書館



蘭学関係資料の件回答 基山町立図書館
蘭学関係資料の件回答 鹿児島県川内市大小路町川内市立図書館
蘭学関係資料の件回答 鹿児島県枕崎市立図書館
蘭学関係資料の件回答 大分県豊後高田市図書館
蘭学関係資料の件回答 宮崎県立図書館
蘭学関係資料の件回答 鹿児島県加世田市立図書館
蘭学関係資料の件回答 熊本大学附属図書館
蘭学関係資料の件回答 久留米市図書館
蘭学関係資料の件回答 八幡製鉄所図書館
蘭学関係資料の件回答 鹿児島県薩摩郡高城町中央公民館
蘭書目録〔調査者：宗田一・中野操 34部 調査地：安田龍夫・小石秀夫及蔵書 1962〕
蘭書目録〔調査者：井上忠 52部 調査地：久留米図書館・大分図書館・九州大学ほか 1962〕
〔蘭学関係資料写真 天文観測・医療器械17点〕
蘭学資料研究会研究報告 蘭書探訪略報告 関西支部編 1963年4月
蘭学資料研究会研究報告第128号 関西支部の蘭書探訪略報告 関西支部編 1963年4月10日
蘭学資料研究会研究報告第129号 久留米の蘭学者松下元芳について 今津健治 1963年4月1日
蘭学資料研究会研究報告第96号 金沢藩壮猶館旧蔵蘭書目録稿 沼田次郎 片桐一男 1961年10月21日
蘭学事始関係資料（昭和22年7月以降） 附：表（古写本）
蘭学資料研究会会則（案） 昭和39年5月10日改正
蘭学資料研究会関西支部規則（案） 昭和39年9月27日
蘭学資料研究会研究報告第115号 上方蘭学者展目録並解説 関西支部編 1962年5月13日
上方蘭学者展目録 1962年5月12日～14日 於京都大学図書館展覧室
郷土博物館第六回陳列品解説 昭和6年8月 財団法人鎌田共済会
長崎祭展示品目録 自昭和25年10月25日至昭和25年11月10日
讃岐偉人久米栄左衛門翁 財団法人鎌田共済会 昭和14年11月1日
開国の偉人 井伊大老 彦根史談会 昭和38年8月1日
丹波修治旧蔵「和蘭文典」の訳語書入について 松村明
わが国の顕微鏡の歩み 〔財団法人科学博物館後援会〕
わが国の望遠鏡の歩み 〔財団法人科学博物館後援会〕
海事参考館 神戸商船大学 昭和36年
「わが国の望遠鏡の歩み」展資料目録（第1回）
おらんだ展覧会出品目録 〔文明協会主催 昭和15年2月1-11日〕
平賀源内先生生地志度 平賀源内先生顕彰会 〔附：絵葉書〕
眼鏡の歴史 日本眼鏡卸組合連合会 昭和35年
万金産業袋（通俗経済文庫本） 三宅也来 享保17年（1732）〔巻三 眼鏡類〕
蘭学資料研究会第4回大会プログラム 1962年5月13日
蘭学資料研究会第4回大会資料 1962年5月13日

〈医薬学関係〉

目でみる医療器械のあゆみ 宗田一 (18) 吸角
目でみる医療器械のあゆみ 宗田一 (19) X線装置
目でみる医療器械のあゆみ 宗田一 (20) 整骨(1)骨折治療器
目でみる医療器械のあゆみ 宗田一 (21) 整骨(2)脱臼治療器
目でみる医療器械のあゆみ 宗田一 (24) 古代の外科器具その1
目でみる医療器械のあゆみ 宗田一 (25) 古代の外科器具その2
目でみる医療器械のあゆみ 宗田一 (26) 中世から近世の外科器具
目でみる医療器械のあゆみ 宗田一 (27) 薬籠
目でみる医療器械のあゆみ 宗田一 (28) 江戸期の外科器具その1
目でみる医療器械のあゆみ 宗田一 (29) 江戸期の外科器具その2

目でみる医療器械のあゆみ 宗田一 (30) 江戸期の外科具その3
目でみる医療器械のあゆみ 宗田一 (31) 江戸期の外科具その4
目でみる医療器械のあゆみ 宗田一 (32) 江戸期の外科具その5
薬事日報 昭和35.04.02 [宗田一 「日本製薬前史」]
薬事日報 昭和39.06.13 [宗田一 「昔の製薬器械器具—その日本化の数例—」]
薬事日報 昭和39.07.04 [宗田一 「南蛮医学から蘭方医学へ」]
Medizin von heute 1958年1日
Medizin von heute 1958年2日
Medizin von heute 1958年3日
Medizin von heute 1958年4日
朱震亨と西洋医学 三木栄 Medizin von heute 1960年
日本・朝鮮・中国医学交流史鳥瞰 三木栄
シーボルト遺愛の外科用具（東京・国立博物館蔵）
馬島流眼科用具の一部（名古屋・馬島清則氏蔵）

〈抜刷類〉

相川佳予子「宋代の服飾について、I かぶりものの変遷」『奈良女子大学家政学会 家政学研究』Vol. 13, No. 1, 2, 1966年
青木一郎・成田洋・山口康夫「知恩院大鐘の周波数測定」[雑誌名不明] [号数, 出版年不明]
Ichiro AOKI, "Experimental Studies on the Sound of a Japanese Temple-Bell ("Ojikicho" in Myoshinji-Temple)", Memoirs of the College of Science, Kyoto Imperial University, Series A, Vol. XV, No. 5, 1932
赤堀昭「シナの古文獻に現れた Dioscorea の考察」『塩野義研究所年報』第13号, 昭和38 (1963) 年
赤堀昭「本邦の古文獻に現れた Dioscorea 属植物の考察」『塩野義研究所年報』第12号, 昭和37 (1962) 年
Koichi KIMURA and Akira AKABORI, "Drugs", in H. KIHARA (ed), Land and Crops of Nepal Himalaya—Scientific Result of the Japanese Expeditions to Nepal Himalaya 1952—53—, Vol. II, Fauna and Flora Research Society, Kyoto Univ., Kyoto, Japan
Shuntaro ITO, "The Medieval Latin Translation of the DATA of Euclid", Reprinted from DISSERTATION ABSTRACTS, volume XXIV, No. 12, 1964
Shuntaro ITO, "Who are Precursors of Galileo in His Pisan Dynamics?—A Criticism on Professor Moodys Paper "Galileo and Avempace"—", Scientific Papers of the College of General Education, University of Tokyo, Vol. 14, No. 2, 1964
伊東俊太郎「中世アラビア科学史研究 (一)」『東京大学教養学部人文科学科紀要』第33輯, 哲学 XII, 昭和40 (1965) 年
伊東俊太郎「『乾坤弁説』の成立について」『蘭学史料研究会研究報告』第168号, 1965年 (川越重昌「佐藤信淵の天文説 (天柱記及び鎔造化育論) を支えている和蘭天文訳書」について) と合冊)
伊東俊太郎「14世紀におけるユークリッド『エレメンタ』の一写本—MS Paris, Bibliothèque Nationale latin 7215について—」『東京大学教養学部人文科学科紀要』第37輯, 哲学 XIII, 昭和41 (1966) 年
伊藤道治「春秋会盟地理考—兩周地理考の二—」『田村博士頌壽東洋史論叢』, 昭和43 (1968) 年
伊藤道治「最近における殷式遺蹟の研究と発掘 (上)」『史林』第4号, 1956年
伊藤道治「先秦史研究展望」『史学雑誌』第70巻第5号, 1960年
伊藤道治「殷代における祖先祭祀と貞人集団—殷王朝の構造, その一—」『研究 (神戸大学)』, 1962年
伊藤道治「先秦時代の都市—その一, 考古学的に見た都白—」『研究 (神戸大学文学会)』第30号, 1963年
伊藤道治「甲骨文・金文に見える邑」『研究 (神戸大学文学会)』第33号, 1964年
伊藤道治「李濟著『中国文明的開始』」『史林』第2号, 1958年
伊藤道治「最近における殷式遺蹟の研究と発掘 (下)」『史林』第5号, 1956年
伊藤道治「出土資料による西周史再構成の試み」『甲骨学』第10号
伊藤道治「殷周時代の建築」(角川版 世界美術全集第12巻)
伊藤道治「甲骨文字研究の現状」『甲骨学』第9号, 昭和36 (1961) 年



- 伊藤義教「西安出土漢蕃合璧墓誌蕃文解説記」『西南アジア研究』No. 13, 1964年
- 伊藤義教「『先師金言要集』とアンダルズ文献研究序説（下）」『オリエント』Vol. VII, No. 2, 昭和39（1964）年
- 足利惇氏・伊藤義教「書評：Olaf Hansen: *Mittelpersisches Lesebuch*, Berlin (Walter de Gruyter & Co.) VII, 97p.に寄せて」『オリエント』Vol. VII, No. 2, 昭和39（1964）年
- 伊藤義教「『先師金言要集』とアンダルズ文献研究序説（上）」『オリエント』Vol. VII, No. 2, 昭和39（1964）年
- 伊藤義教「西安出土漢、婆合璧墓誌蕃文語言学的試釈」『考古学報』, 1964年
- 井上吉次郎「人狐弁惑談」『東西学術研究所論叢（関西大学東西学術研究所）』第39号, 昭和35（1960）年
- 井本進「遊星惑星源流考(1)」『天界』第253号, 「遊星惑星源流考(2)」『天界』第254号
- 井本進「景気予測の可能性について」[], 昭和17（1942）年
- [長慶宣命暦序（写真紙焼きカ）]
- “Calender Reform”, *The Monthly Summary of the League of Nations*, Vol. XI, No. 6, June 1931
- “Calender Reform”, *The Monthly Summary of the League of Nations*, Vol. XI, No. 10, Oct. 1931
- 今村城太郎「漢書溝洫志私考—古代中国の黄河対策とその周辺—」『研究紀要（日本大学人文科学研究所）』第9号, 1966年
- 今西春秋「満文武皇帝実録の原典」『東西学術研究所論叢（関西大学東西学術研究所）』第40号, 1960年
- Tomozane IWAKURA, “Ugoki no buruiwake to sirippo no magari kata ni tuite”
- 上田穰「具中暦断簡」『科学史研究』第3号, ? [1942年]
- 上田穰「古暦診断学」『天文月報』Vol. 36, No. 11, 1943年
- Joe UETA, “Graphical Computation of Jupiter’s Perturbation on Asteroids”, *Memoirs of the College of Science, Kyoto Imperial University, Series A*, Vol. XVIII, No. 1, 1935
- 上村六郎「藩政末期に於けるある山村の生活—河内国滝畑村の場合—第4部衣生活」『大阪学芸大学紀要』第3号, 昭和29（1954）年 [昭和30（1955）年発行]
- 上村六郎「支那古代の製紙原料—附「かち」と「かうぞ」について—」『和紙研究』第14号
- 内田吟風「魏書刑罰志缺葉考」『東西学術研究所論叢（関西大学東西学術研究所）』第34号, 昭和35（1960）年
- 内山守常「岩波書店刊『日本史年表』の「和暦・西暦対照表」の誤りについて」『横浜国立大学論叢人文科学系列』第18巻第1号, 昭和42（1967）年
- 京都大学ヨーロッパ学術調査隊バスク班（梅棹忠夫・竹内成明）『バスク文献資料目録』
- 宇都宮清吉「漢代に於ける家と豪族」『史林』第24巻第2号
- 宇野惇「インド論理学に於ける限定詞の用法」『東西学術研究所論叢（関西大学東西学術研究所）』第38号, 昭和35（1960）年
- 梅田俊一「奈良時代の具注暦に見える天道・人道について」『京都府立大学学術報告 人文』第13号, 昭和36（1961）年
- 海野一隆「岸田吟香とシナ地理学研究」『兵庫地理』第8号, 昭和38（1963）年
- 大庭修「唐元和元年高階真人遠成告身について—遣唐使の告身と位記—」『東西学術研究所論叢（関西大学東西学術研究所）』第41号, 昭和35（1960）年
- 大矢真一「明治時代における数学用語集の研究」『富士論叢』第11巻, 昭和41（1966）年
- 大矢真一「『算法珍書』注解」『富士論叢』第12巻第1号, 昭和42（1967）年
- Hiroshi OKAMURA, “Sur les coefficients de Taylor des fonctions entières d’ordre fini”, *The Tohoku Mathematical Journal*, Vol. 38, Second Memorial Volume on the Occasion of the 60th birthday of the Editor T. HAYASHI, Tohoku Imperial Uni., Sendai, Japan, 1933
- 小川茂樹「甲骨文字書体の変遷」
- 小川裕人「遥輦氏伝説成立に関する史的考察」『満蒙史論叢』第3号, 昭和15（1940）年
- 小川琢治「居住地理学の問題としての日本住宅（二）（藤田文学士の日本民家史）」『地球』第9巻第2号, 昭和3（1928）年
- 小川琢治「丹後峰山地震の現象とその解釈」『奥丹後震災誌』
- 小野川秀美「唐有為の変法論」『近代中国研究』第2輯
- 尾崎千恵子「江戸中期、京都における甘藷の流行」『四条畷学園女子短期大学研究論集』第1号, 昭和42（1967）年
- 岡西為人「中国本草の伝統と金元の本草」, 藪内清編『宋元時代の科学技術史』, 昭和42（1967）年

- 川勝義雄「江戸時代における世説研究の一面—建仁寺高峰和尚の研究をめぐって—」『東方学』第20輯，昭和35（1960）年
- 川勝義雄「マスベロの道教理解について」『東方宗教』第19号，昭和37（1962）年
- 岸辺成雄「唐代教坊の創設及び変遷」『東洋学報』第28巻第2号，昭和16（1941）年
- Siro KITAMURA, “Compositae Japonicae, Pars Quarta”, *Memoirs of the College of Science, University of Kyoto, Series B, Vol. XXII, No. 1*, 1955
- Siro KITAMURA, “Taxonomy of Some Cultivated Plants”, in H. KIHARA (ed), *Land and Crops of Nepal Himalaya—Scientific Result of the Japanese Expeditions to Nepal Himalaya 1952—53—*, Vol. II, *Fauna and Flora Research Society, Kyoto Univ., Kyoto, Japan*
- 『植物分類，地理』第14巻第4号，昭和27（1952）年
- 『植物分類，地理』第14巻第5号，昭和27（1952）年
- 『植物分類，地理』第14巻第6号，昭和27（1952）年
- 『植物分類，地理』第15巻第1号，昭和28（1953）年
- 舩野忠次「中国最古の『天』の文字」[甲南女子大論叢1956年刊別冊（表紙のペン書き）]
- 加藤平左エ門「和算に於ける微分概念に就て（続）」『名城大学理工学部研究報告』第6号，1965年
- 木村英一「古鈔本淮南子兵略篇に就いて」『支那学』第10巻第2・3号
- 木村英一「五行思想の成立と其背景」『支那学』第10巻第1号
- 木村康一「江南の農業（一）」『自然』第7号，昭和13（1938）年
- 小石秀夫「顕微鏡出世物語」[]
- 近藤光男「清朝経師における科学意識—載震の北極瑤璣四游解を中心として—」[]，[1953?]。
- 顧廷龍「讀漢金文小記」『史学年報』第2巻第5期
- Akira KOBORI, “Zur Theorie der mehrwertigen Funktionen”, *Japanese Journal of Mathematics*, Vol. XiX, 1947
- 野末佳子「漢武梁祠衣服考」『生活文化研究』第12冊，昭和38（1963）年
- 斎藤実郎「蔡倫に関する一・二の問題」『日本大学史学会 史叢』第11輯，1967年
- 阪上正信「Fission Track など荷電粒子の固体内飛跡とその応用」，*Radioisotopes*, Vol. 17, No. 5, 1968
- [[「年代測定法」短期研究会のおしらせ] など4点]
- 坂出祥伸「清末に於ける西欧論理学の受容について」『日本中国学会報』第17集，昭和40（1965）年
- 佐藤武敏「宋代における湖水の分配—浙江省蕭山県湘湖を中心に—」『人文研究』第7巻第8号，昭和31（1956）年
- 佐藤武敏「中国古代の漆器工業」『人文研究』第9巻第11号，昭和33（1958）年
- 佐保田鶴治「印度古代に於ける神秘思想の論理」『立命館創立四十周年記念論文集』，皇紀2600（1940）年
- 島邦男「克殷年月日考」『集刊東洋学』第14号，1965年
- Eikoh SHIMAO, “Between Science and Humanism—On C. C. Gillispie—”, *Japanese Studies in the History of Science*, No. 5, 1966
- 島田虔次「明代思想研究の現段階」[歴史教育（表紙のペン書き）]
- 嶋田玄彌「輕粉考」『生薬学雑誌』Vol. 6, No. 2, 1953年
- Rikiti SEKIGUTI, “Note on the Meteorology of the Sun”, *Bulletin of the Central Meteorological Observatory of Japan*, Vol. IV, No. 1, 1928
- 外山軍治「丁先生物語（その一）」『立命館文学』第87号，1952年
- 外山軍治「丁先生物語（その三）」『立命館文学』第89号，1952年
- 園正造「書紀の暦について」『京都府立大学学術報告 人文』第17号，昭和40（1965）年
- 園正造「書紀の暦について（続編）」『京都府立大学学術報告 人文』第18号，昭和41（1966）年
- 園正造「釈尊の成等正覚について」『京都府立大学学術報告 人文』第20号，昭和43（1968）年
- 高橋真太郎「第7回くすり史蹟めぐりの記」『薬局（南山堂刊）』第13巻第7号，1962年
- 高橋盛孝「タタラ考原」『東西学術研究所論叢（関西大学東西学術研究所）』第42号，1960年
- 瀧遼一「支那古代の楽律についての私見」『東洋音楽研究』
- 田坂興道「閩書に見える唐式徳年間回教伝來說話について」『東方学報』東京第14冊之3，昭和18（1943）年
- 間直之助「馬の表情」『植物及動物』第9巻第2，3，4，5，6号，昭和16（1941）年



- Eikoh MA, "Japan's Encounter with Western Medical Science: "The Beginning of Dutch Study", Being the Memoirs of an 18th-Century Doctor", Bulletin of the History of Medicine, Vol. XXXIII, No. 4, 1959
- ギリスピー著・馬永康訳「科学と啓蒙思潮」
- 米田茂男「新中国の農業及び研究状況」『農業及園芸』第32巻第9, 10号, 昭和32(1957)年
- 渡辺正「大蒜(にんにく)考」『大阪市立大学家政学部紀要』第9巻, 1961年
- 渡辺正「大蒜(にんにく)考 その2」『大阪市立大学家政学部紀要』第10巻, 1962年
- 渡辺正・岩田四郎・大谷芳子「ニンニク有効成分の研究 第1報 ニンニク中の酵素の分布及び未知還元性物質の存在」『大阪市立大学家政学部紀要』第11巻, 1963年
- 渡辺正「アリウム属植物周辺の散歩(1)(2)」, Nature Study (大阪自然科学研究会発行), Vol. 10, No. 4, 5, 1964年
- 渡辺正・岩田四郎・筒井美恵「ニンニク有効成分の研究 第2報 ビタミンC保護物質の探求」『大阪市立大学家政学部紀要』第12巻, 1964年
- 渡辺正「延喜式の漬物」『風俗』第8巻第1号, 昭和43(1968)年
- 渡辺武「病草紙(富岡鉄斎筆)と腹証図」, Appointment Book, 1965年(武田薬品工業株式会社・日本レダリー株式会社)
- 渡辺武『銘椿譜』
- 渡辺武「探椿譚(その五)」, 京都園芸『椿』第9特集号, 昭和43(1968)年
- 『天界』第34巻第343号, 1953年(渡辺敏夫「古記録の凌犯について」所収)
- 上田穰・渡辺敏夫・森川光郎「1936年6月19日の日食観測概報」『日本天文学会要報』第5巻第2冊, 昭和12(1937)年
- 渡辺敏夫「東亜に於ける中心日食表」第3号A, 昭和27(1952)年
- 渡辺敏夫「東亜に於ける中心日食表 第二部 中心食帯」『商船大学研究報告』第4号A, 昭和28(1953)年
- 渡辺幸三「中央亜細亜出土本草集注残簡に対する文献学的研究」『日本東洋医学会誌』第5巻第4号(通巻16号)
- 関西支部年表班編「新撰洋学年表について(I)(II)」『科学史研究』第18号
- 岩治勇一「『国事叢記』中に観られる和蘭甲比丹献上物考」
- Nathan SIVIN, 鍊丹術史窺管 Chinese Alchemy as a Science.
- 篠田統「鮓考その3紀伊, 南大和の鮓—熊野灘魚系のすし—」『生活文化研究』, 1953年
- 篠田統「粉食の展開」『大阪学芸大学紀要』第11号, 昭和37(1962)年[昭和38(1963)年発行]
- 篠田統「家庭科における『社会的』なるもの」『大阪学芸大学紀要』教育第2号, 昭和35(1960)年[昭和36(1961)年発行]
- 篠田統「『山内者』の生活」『大阪学芸大学紀要』第10号, 昭和36(1961)年[昭和37(1962)年発行]
- 篠田統「粉食の展開」『大阪学芸大学紀要』第11号, 昭和37(1962)年[昭和38(1963)年発行]
- 篠田統「奥能勢の酒造史資料」『大阪学芸大学紀要』第8号, 昭和34(1959)年[昭和35(1960)年発行]
- 篠田統「西日本の酒造杜氏集団」『京都大学人文科学研究所調査報告』第15号, 1957年
- 篠田統「近世末期江州野洲郡における酒造業とその技術」『大阪学芸大学紀要』第5号, 昭和31(1956)年[昭和32(1957)年発行]
- 篠田統「わが国在来の酒造法」『日本醸造協会雑誌』第59巻第12号
- 篠田統「釣瓶鮓縁起」『大阪学芸大学紀要』第7号, 昭和33(1958)年[昭和34(1960)年発行]
- 篠田統「続小豆雑煮—裏日本と表日本との文化交流の経路について—」『大阪学芸大学紀要』第6号, 昭和32(1957)年
- 篠田統「小豆雑煮—志摩国海女民俗断片—」『大阪学芸大学紀要』第2号, 昭和28(1953)年
- 篠田統「満州長嶺ベスト地帯の生態学的観察」『小林晴治郎博士古稀祝賀記念誌(衛生動物第IV号特別号)』, 昭和29(1954)年
- 篠田統「鮓考 その4北陸の鮓—富山湾魚系の鮓—」『生活文化研究』, 1953年
- 篠田統・飯田喜代子・安孫子保子「近江カルスト台地の生活」『生活文化研究』, 1953年
- 篠田統・飯田喜代子「鮓考 その6近畿・中国の鮓」『大阪学芸大学家政科研究業績集』No. 3, 昭和29(1954)年
- 篠田統「土族屋敷」『生活文化研究』第7冊, 昭和33(1958)年
- 篠田統「資料紹介—江州野洲郡北組酒造仲間の桶帳—」『生活文化』第6冊, 昭和32(1957)年

- 篠田統「南都多聞院の酒造」『生活文化研究』第7冊，昭和33（1958）年
- 篠田統「播州宍粟郡繁盛村民族志」『生活文化』第6冊，昭和32（1957）年
- 篠田教授退官記念講演「名婦伝（要旨）」，昭和40（1965）年，於大阪学芸大学
- 篠田統「近江の鮓（鮓考 その2）」〔表紙左上に「大阪学芸大学家政科研究業績第10号」の印あり〕
- 篠田統「鮓考 其7 東海・関東の鮓」『大阪学芸大学家政科研究業績集』No. 3，昭和29（1954）年
- 篠田統・飯田喜代子「鮓と米—わが国における稲の導入経路に関する一考察—」『大阪学芸大学紀要』第4号，昭和30（1955）年〔昭和31（1956）年発行〕
- 篠田統「新おもむ物語—機無女聞書—」『生活文化研究』第9冊，1960年
- 篠田統「家政学序論」，1968年，II，15〔書誌情報は表紙ペン書きによる〕
- 篠田統「日本酒の源流」『風俗』第6巻第4号
- 篠田統「飲膳正要について」，藪内清編『宋元時代の科学技術史』，昭和42（1967）年
- 篠田統「宋元酒造史」，藪内清編『宋元時代の科学技術史』，昭和42（1967）年
- 篠田統「美作国新庄村」『生活文化研究』第9冊，1960年
- 篠田統「『種譜』と朝鮮の甘藷」『朝鮮学報』第44輯，昭和42（1967）年
- 篠田統「羊羔酒」『四条啜学園女子短期大学研究論集』第1号，昭和42（1967）年
- 篠田統「河内風俗聞書1」『四条啜学園女子短期大学研究論集』第1号，昭和42（1967）年
- 篠田統「幽風七月の舞台」『大阪学芸大学紀要』B第13号，昭和39（1964）年〔昭和40（1965）年発行〕
- 『民俗』第3号第1号（豊中市立民俗館）〔篠田統「丹波大山民俗断片」所収〕，1959年
- 篠田統「中国に於ける鮓の変遷（鮓考。その1）」〔表紙左上に「大阪学芸大学家政科研究業績第9号」の印あり〕
- 篠田統「鋤焼雑考」
- 篠田統「豆腐考」『風俗』第8巻第1号，昭和43（1968）年
- 篠田統「池田酒造史」『池田市史各説篇』
- 篠田統「鮓考 その10 鮓年表 その2 日本の部」『生活文化（大阪学芸大学池田分校）』第10冊，昭和36（1961）年
- 篠田統「家庭科の基盤」『生活文化』第5冊，昭和31（1956）年発行。
- 篠田統「鮓考 その9 鮓年表—シナの部」『生活文化』第6冊，昭和32（1957）年
- 篠田統「車窓から見た近ごろの衣生活」『生活文化研究』第11冊，昭和37（1962）年
- 篠田統「唐代の茶」『生活文化研究』第11冊，昭和37（1962）年
- 篠田統「伊那の春」『生活文化研究』第12冊，昭和38（1963）年
- 篠田統「推理小説とアメリカン・ライフ」『生活文化研究』第12冊，昭和38（1963）年
- 篠田統「手釀りから杜氏集団へ 酒屋試論」『生活文化』第4冊，昭和30（1955）年
- 篠田統「藩政末期における或る山村の生活—河内国滝畑村の場合—第5部 村の出来ごと」『生活文化』第4冊，昭和30（1955）年
- 篠田統・飯田喜代子「鮓考 その8，四国の鮓」『生活文化』第4冊，昭和30（1955）年
- 飯田喜代子・安倍里子・村上房子「中国の鮓の復元」『大阪学芸大学家政科研究業績集』No. 3，昭和29（1954）年
- 飯田喜代子「山家清供から見た宋代の文人料理」，Memoirs of the Osaka Univ. of Liberal Arts and Education, B Natural Science, No. 12, 1963
- 『生活文化研究』第9冊，1960年（生活文化同好会）。〔篠田統「美作国新庄村」，飯田喜代子「越後の食生活管見」など所収〕
- 沖田昌子「芸芸台地のスシ」『生活文化（大阪学芸大学池田分校）』第10冊，昭和36（1961）年
- 佐々木秀子「丹後杜氏の実態に就いて」『生活文化研究』第8冊，1959年
- 長尾直「農婦と海女とロールシャッハ・テスト」『生活文化研究』，1954年
- 大阪学芸大学家政学研究室編「三ヶ牧村生活実態調査報告」『生活文化研究』，1953年
- 森本弐・中田一郎・田和好・多田加寿子「大阪府豊能郡西能勢村正月風俗」『生活文化研究』，1954年
- 大阪学芸大学家政学研究室編「志摩国片田村生活実態調査報告」『大阪学芸大学家政科研究業績集』No. 3，昭和29（1954）年
- 瀬尾由紀子・本田幸子「山陰におけるちまきとかしわもち」『生活文化研究』第7冊，昭和33（1958）年



- 村上君子・阪田智栄子「酒造出稼が家庭生活に及ぼす影響—兵庫県多紀郡丹南町旧大山村—」『生活文化研究』第7冊，昭和33（1958）年
- 菅野省子・高木英子「出雲そば」『生活文化（大阪学芸大学池田分校）』第10冊，昭和36（1961）年
- 塩尻桂子「一寸そら豆について」『生活文化（大阪学芸大学池田分校）』第10冊，昭和36（1961）年
- 大阪学芸大学家政学研究室編「河内長野市瀧畑生活実態調査報告」『生活文化』第4冊，昭和30（1955）年
- 篠田有策「新おあむ物語蛇足」『生活文化（大阪学芸大学池田分校）』第10冊，昭和36（1961）年
- Osamu SINODA, On the Origin of Japanese Sake Brewery, Abstract [sic] from the Paper contributed to "The Japanese and Cultures of the Southern Areas" published by the Committee for the Commemoration of Takeo KANASEKI's seventieth Birthday. Tokyo, 1967
- Nathan SIVIN and Chaoying Fang, "Wang Hsi-shan", Dictionary of Ming Biography, New York, 1976
- Nathan SIVIN, "Wang Hsi-shan", Dictionary of Scientific Biography, Vol. XIV, New York, 1976
- Nathan SIVIN, "Shen Kua", Dictionary of Scientific Biography, Vol. XII, New York, 1975
- Nathan SIVIN, "Li Shih-chen", Dictionary of Scientific Biography, Vol. XIII, New York, 1973
- Nathan SIVIN, "Sun Ssu-mo on Medical Ethics, Part 3 of the Introduction to Pei Chi Ch'ien Chin Yao Fang 備急千金要方 (Prescriptions worth a thousand, written between 650 and 659)"
- Nathan SIVIN, Book Review on Hsi-fang Li-suan-hsueh chih Shu-jua (The Introduction of Western Astronomical Sciences into China by Wang P'ing, in Journal of Asian Studies, Vol. 29, 1970
- Nathan SIVIN, "On the Pao P'u Tzu Nei P'ien and the Life of Ko Hung (283-343)", Isis, Vol. 59, 1968
- Nathan SIVIN, Book Review on Clerks and Craftmen in China and the West. Lectures and Addresses on the History of Science and Technology by Joseph Needham, in Isis, Vol. 64. 3. 223, 1973
- Nathan SIVIN, Book Review on An Annotated Bibliography of Selected Chinese Reference Works, Third Edition by Ssu-Yü and Knight Biggerstaff, in Isis, Vol. 64. 4. 224, 1973
- Nathan SIVIN, Book Review on Al-Bahir en Algèbre d'As-Samaw'al edited by Salah Ahmad and Roshdi Rashed, in Isis, Vol. 67. 2. 236, 1976
- Nathan SIVIN, Book Review on Changing Perspectives in the History of Science, Essays in Honour of Joseph Needham edited by Mikulas Teich and Robert Young, in Isis, Vol. 67. 3. 238, 1976
- Nathan SIVIN, Book Review on Science and Civilization in China, Vol. 4 Physics and Physical Technology, Part III Civil Engineering and Nautics by Joseph Needham with the collaboration of Wang Ling and Lu Gwei-djen
- Nathan SIVIN, Book Review on Science and Technology in the Development of Modern China: An Annotated Bibliography edited by Genevieve C. Dean and Bibliography on Technology and Social Change in China and Japan edited by Roberta Abraham, in Technology and Culture, Vol. 17, 1976
- Nathan SIVIN, Book Review on The Grand Titration by Joseph Needham, in Journal of Asian Studies, August 1971
- Nathan SIVIN, Book Review on The History of Imperial China: A Research Guide by Endymion Wilkinson, in Journal of Asian Studies, Vol. 34, 1975
- Nathan SIVIN, Book Review on Ch'i: A Neo-Taoist Approach to Life by R. G. H. Siu, in Quarterly Review of Biology, Vol. 50, 1975
- From N. SIVIN (dated in 3 Jan. 1977)
- Nathan SIVIN, "Èloge: Giorgio Diaz de SANTILLANA"
- Nathan SIVIN, "Chinese Alchemy and the Manipulation of Time", Isis, Vol. 67 (No. 239), 1976

藪内清筆録『編暦法講義』（昭和15年・17年 2冊）



隠れた偉才の天文学遺産

宮島 一彦

これは、藪内清先生（1906～2000.6.2）最晩年の弟子である矢野道雄・川原秀城および筆者の間で、「百済ノート」と呼んでいるもので、藪内が東方文化研究所時代に、偉才・百済教猷先生（くだらきょうゆう 1894～1964.12.8）から受けた講義のノートであり、2冊からなる。以下、敬称を略する。

百済は1911年9月に第三高等学校大学予科に入学、まもなく山本一清（やまもとかずき よ→いっせい 1889～1959.1.16）と知り合い、14年7月に卒業した（文献2）。1917年に東京帝大理科大学星学科をいわゆる「銀時計」で卒業し（文献3）、すぐに東京天文台技師となったが、1928年、退官して大阪の実家である聞信院（文献4。文献5では聞信寺）に戻った。

その間の1920年、山本・古川龍城両氏とともに東亜天文学会を創設したが、山本が死ぬとそのあとをついで2代目の会長となり、山本が大阪市立電気科学館の天文講演会で毎月一回行っていた講演も引き継いだ。このとき筆者もその声咳に接することができたが、中学～高校生だった筆者から見た百済はおよそ話下手で、毎月の演題もやがて「天文雑話」となった。星のことを親しみをこめて「星（ほっ）さん」と呼び、望遠鏡で星を眺めることを「星覗き」と呼んでいた（文献2）。1920年5月、テンペル第2彗星の回帰を世界に先駆けて発見した（文献8）にもかかわらず、誰にも知らせず独り望遠鏡で覗いて楽しんでいたため、あとで知った山本がかんかに怒ったと聞いたことがある。大の鉄道マニアで、本堂に鉄道を敷いて、ミニチュア機関車を走らせていたという（神田壹雄談）。世界最大となるパロマー山天文台の口径5m08cm反射鏡を運んだ列車の模型を天文講演会に持参したこともあった。

藪内は1929年3月に京都帝大宇宙物理学教室を卒業してそのまま教室に残ったが、その年、教室の創設者・新城新蔵教授（しんじょうしんぞう 1873～1938）が総長となり、上田穰（うえだじょう 1892～1976）・荒木俊馬（あらかとしま 1897～1978）両助教授が外国に留学、教室には山本教授・竹田新一郎助教授（1901～1939）・上島昇講師（藪内の1年先輩）しか居なくなった。そこで両助教授の留守期間中、助教授として天体力学・軌道論などの講義を担当することになったのが百済だった。この時期百済の講義を聴いた人には、藪内の先輩で当時東方文化学院の研究員であった能田忠亮（のうだちゅうりょう 1899～1987）もいた。藪内はこのときの講義を「ほんとに楽しく聞くことができた」と追悼文に記し（文献10）、



能田も「その学殖の豊かなこと、理論の整然たるに深い感銘を覚えた」と書いている（文献4）。学生時代に新城の中国天文学史の講義を聴いたことと、百済の講義を聴いたことが、藪内ののちの研究に大きな影響を与えた。しかし、両助教授が帰朝すると、1921年、百済はさっさと教室をやめて大阪に引っ込んでしまった。

その後も藪内はしばしば百済の自宅を訪れたが、戦争が始まると、東方文化研究所では能田が外務省の援助を受けて東洋暦術調査事業を始め、同時に海軍水路部が暦計算の仕事を東京天文台から疎開させる目的でその一部を研究所に委託してきたため、女学校出の若い女性5～6人を雇って暦計算の手伝いをやらせることになった。能田と藪内はこのように忙しくなった研究所の仕事の指導を百済に仰いだ。百済は囑託として若い女性たちの指導もしたが、一方で藪内、能田、清永嘉一（1911～1992）、それに恐らく渡辺敏夫（1905～1998）らを相手に暦計算法・日月食計算法の講義をした。先に筆者から見ると話下手と書いたが、実際、天文講演会では電気科学館の人たちが少々手を焼いていたし、神田壹雄（かんだかずお 1908～1987.9.15）も追悼文で「（お宅に伺って）先生と二人で話をすると、講演と違って、先生はなかなか雄弁で話題も豊富で」と書いている。しかし能田はこの時の講義を「先生の講義は明快で而も懇切丁寧、その内容は具体的で先生の創意工夫に基づく所が随所に見受けられ、実に素晴らしいものであった」（文献4）と書き、藪内も「百済先生の講義だけは、まさに天下一品であった。…ありきたりの教科書の内容とはまるで違っていた。…1つの問題に対しあらゆるケースを吟味して、徹底的に追及するというやり方であった。すべてが先生の頭の中で消化されていたから、古いテーマも生き生きとした形で先生の口から迸り出たのである」（文献10）と述懐している。

かくして「これらのノートは、現在も私の貴重な財産となっている」（同上）。それがすなわち、ここにいう“百済ノート”である。

後で製本されたらしく、布地ハードカバーの分厚いもので、背表紙に、臙脂色の一冊には「編暦法講義（昭和十五年）」、もう一冊の緑の布表紙で背だけが赤い方には「編暦法講義（昭和十七年）」といずれも金字が押されている。昭和15年は西暦1940年である。

前者はまず4ページ分のContentsのうち3ページまで目次が英文で書かれ、本文第1ページ目の一行目左端に小さく「昭和十五年五月二日（木）開始 第二回以後（金）ニ変更」とあり、2行にわたって Chap. I Differential & Differentiating the Tabulated Numerical Values of a Function. とある。階差および補間法についてである。以下、Chap. II Rising, Setting of the Sun and the Moon すなわち日月の出没計算、Chap. III Rising, Setting of stars and allied phenomena（本文中では phenomena と綴る）すなわち恒星の出没その他の関連現象、Chap. IV 二十四節気、雑節、Chap. V Moon & Planetary Aspects すなわち月および惑星現象までが目次にはあり、第5章の最後は §41 Planetary Aspects 229ページとなっているが、本文は §41が233ページまであって、そのあとがまだ延々と続く。ノートには301までページが打たれ、次のページまで記載があって §58 Kan Chih of a Year つまり干支の計算で終わり、1ページ空白の後、次ページに「追加（昭和16年3月14日）」、続くページに § 北斗の建立とある。中国天文学で重要な、いわゆる「斗建」（北斗の柄の2星が指す方角で季節を表す）の計算で、何ページにもわ

[illegible]

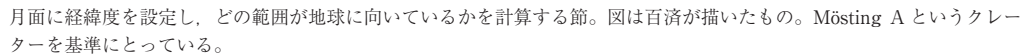
百濟ノートに貼られた百濟先生自筆の表。二十四節気における昼夜の長さを1日を100刻として計算したもの。貞享暦・寛政暦・天保暦・現代の計算値を日出より日入まで明け六つより暮れ六つまで、2つの場合について比較している。

たっている。そのあと「編暦事業（5gt. 6nt. Syw. 16.）」と題して欧米の編暦局の変遷や現状が記されている。

その次に、「各国ノ編年事業. 昭和16年12月5日①」とあって、新しい講義がI. Principal Astronomical Ephemerides から始まり、12月19日②II. Tables of Motion of Major Planets, ③は記載漏れで、昭和17年1月16日④を経て、1月23日⑤ §9. Formulae in Planetary Tables, 17. 2. 6⑥ Ross' Corr. to Mars, 等々、ノートの終わりまで約120ページ、§30まであり、最後の日付と回数は17. 4. 27⑭である。始めの講義分と合わせると、計約420ページにのぼる。

2冊目はその続きである。最初のページに縦書きで「編暦法講義（昭和十七年）」とあり、11ページの白紙があってその次のページからが § 31. Remarks on the Determination of Physical Libration に始まる本論である。Libration は秤動と訳され、いつも地球に同じ面を向けている月が、僅かに上下左右に首を振って見える現象である。つぎのページに 17. 5. 4^⑤ という日付と回数の記載があり、タイトルは Observation となっている。以下、若干の白紙ページも含めて約281ページにわたって書かれており、第57回で終わっている（日付は 19. 3. 30）。最後は、左欄に 19. 4. 13^{⑤8} とだけ記入されていて、本文は書かれていない。その後、空白ページが95枚分ある。

ところどころに計算表や図などの書かれた紙片が貼り付けられている。これは百済が「長い数値表になると、お宅で何枚もきれいに書いてきて1人1人に渡してくださった。それもノートに貼りつけるのに便利な大きさで、実にきれいに書かれていた」(同上)。コピー機械などなかった時代の話である。百済は色に対する好みが強く、グリーンのインクをよく使ったというが、貼りつけられた紙片のインクの色は青色である。



この1年後の1945（昭和20）年3月13日の空襲で百済の自宅の寺は全焼、2冊ずつ買っていた膨大な数の書物も、研究資料も、講義ノートも失われた。「ただ東方文化研究所に持ち込まれてあったものだけが僅かに戦災をまぬかれた」（文献4）。

が、しばらくして研究所を訪れた百済は「講義のノートをすっかり書きなおしたと全く屈託のない態度で話された」（文献10）。「…すべての内容が頭の中にしまいこまれていたのであろう」（同上）と想像される。

藪内は追悼文の最後に「こんなすばらしい学者に、私は私の生涯にもう再び出会うことがないような気がする。私の手許に残された講義が、何らかの形で世に出るようになればと思うのだが、…」と書いている。人文科学研究所において大切に保存し、また人の活用に供していただきたいものである。

なお、能田の追悼文（文献4）には「（百済）先生の編暦法・食論・天体暦作成の三編15章184節にわたる講義を筆記しておいたノートが10冊ばかり残った」とあり、藪内のノートの通算の章数及び節数と一致しない。（同志社大学元教授）

主な参考文献

1. 神山幸雄「百済教猷」，中山茂（編）『天文学人名辞典』（恒星社厚生閣，1983）。
2. 百済教猷「想い出」，『天界』第40巻3・4月号（合併，東亜天文学会，1959）。山本一清追悼号。
3. 「百済教猷君の卒業」，『天文月報』第10巻7月号（日本天文学会，1917）。
4. 能田忠亮「百済先生を偲ぶ」，『天文月報』第58巻4月号（日本天文学会，1965）。
5. 「大英断で騒音料」，『大阪朝日新聞』1935. 7. 18。
6. 佐々木哲夫「京都に於ける彗星の観測」，『天文月報』第12巻12月号（日本天文学会，1919）。
7. 百済教猷「フィンレー・佐々木彗星に就いて」，同上。
8. 神田茂「テンペル第二彗星の発見」，『天文月報』第13巻6月号（日本天文学会，1920）。
9. 木辺成麿「故百済教猷先生を悼む」，『天界』第46巻1月号（東亜天文学会，1965）。
10. 藪内清「百済先生の学風」，同上。
11. 小槇孝二郎「百済先生のご逝去を悼む」，同上。
12. 神田壹雄「百済教猷先生の思い出」，同上。『天文月報』にもほぼ同文あり。
13. 藪内清『中国科学史研究をふりかえって』（同朋舎，1982）。
14. 藪保男「本会2代目会長 百済教猷先生の33回忌に寄せて」，『天界』第78巻3月号（東亜天文学会，1997）。
15. 『昭和53年9月現在 卒業生及修了者名簿』（京都大学理学部宇宙物理学教室，1978）。

森立之等編『本草経集注』第2次稿本

(森立之手稿本，羅振玉・岡西為人旧蔵 7冊)

岡西為人編『重輯新修本草』白筆草稿 (大小2冊)



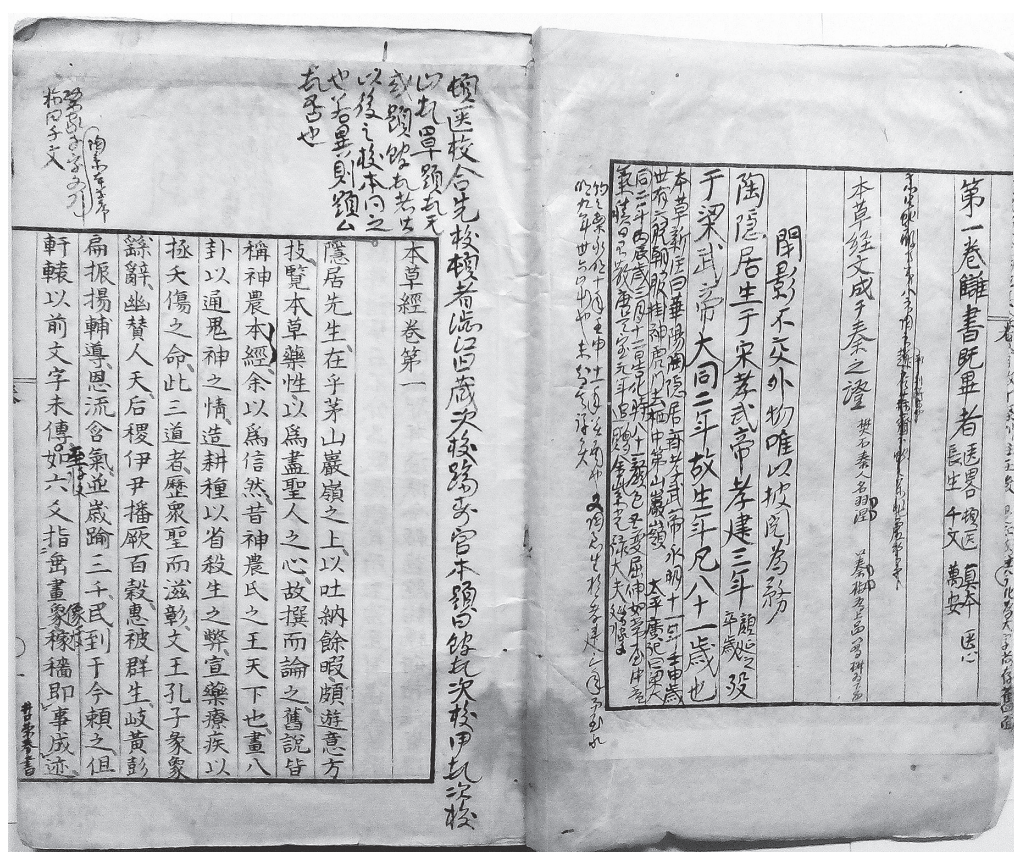
古本草書の復原と中国環流現象

武田 時昌

1

東アジアの伝統医療は、鍼術、灸法、按摩マッサージ、骨接ぎなどの諸術、方剤調合を中心とする薬物療法を2本の柱として大いに発展した。薬物には薬草をはじめ天然自然の産物を何でも用いたが、それに関する科学知識をめぐって本草学と呼ばれる中国特有の学問を形成した。本草学の理論形成は、長沙馬王堆の前漢墓から出土した『五十二病方』等の発見によって秦代以前にまで遡ることが判明したが、中世以降の展開においては後漢末に編纂された『神農本草経』が中心視された。『神農本草経』に継いで『名医別録』（著者不詳）が著された後、陶弘景が『神農本草経集注』（通称『集注本草』）を著し（500年頃）、両書の薬物を統合する。さらに、唐代に『新修本草』（659）が勅撰され、宋代に『証類本草』等のいくつかの本草書を経て、明末の『本草綱目』（1596）に至るまで増補改訂がなされた。そのような本草書の編纂は、『神農本草経』のスタイルを踏襲しており、前代の本草書の成果を統合するものであったが、そのためにかえって前代の本草書の多くは後世に伝わらなくなった。したがって、近世において復古主義的な考証学が盛んになると、『神農本草経』をはじめとする古本草書の復原が重要な課題と見なされた。

我が国においては、数多くの古典籍が伝存しており、原書や引用文によってすぐれた復原作業が可能であった。そのため、江戸後期には、中国をはるかに凌ぐ本草学研究が結実した。とりわけ江戸医学館に集まった俊英達によって成し遂げられた幕末の医書復刻プロジェクトは、特筆すべきものであった。江戸医学館の復刻で最もよく知られているのは、半井家秘蔵の『医心方』である。医学館の前身は、幕府奥医師多紀家が開設した私塾、躋^{せい}寿館^{じゅかん}であり、寛政3年（1791）に幕府直轄となった。プロジェクトの最高責任者は、多紀元堅（多紀元簡の第5子）、その甥の^{もとあき}元昕^{もとあき}であり、校勘作業の中心人物は、澁江抽斎、伊澤柏軒（伊澤蘭軒の子）、森^{きえん}枳園^{きえん}（森立之）、堀川舟庵の4人である。また、安政の改革を推進した老中、阿部正弘も半井家から『医心方』を借り出す折衝などに大きな貢献をなした。医学館を中心とする考証学者は、『医心方』だけではなく、『備急千金要方』『千金翼方』などの善本医籍を校刻するとともに、亡逸した古本草書の復原作業を協同で行った。後者



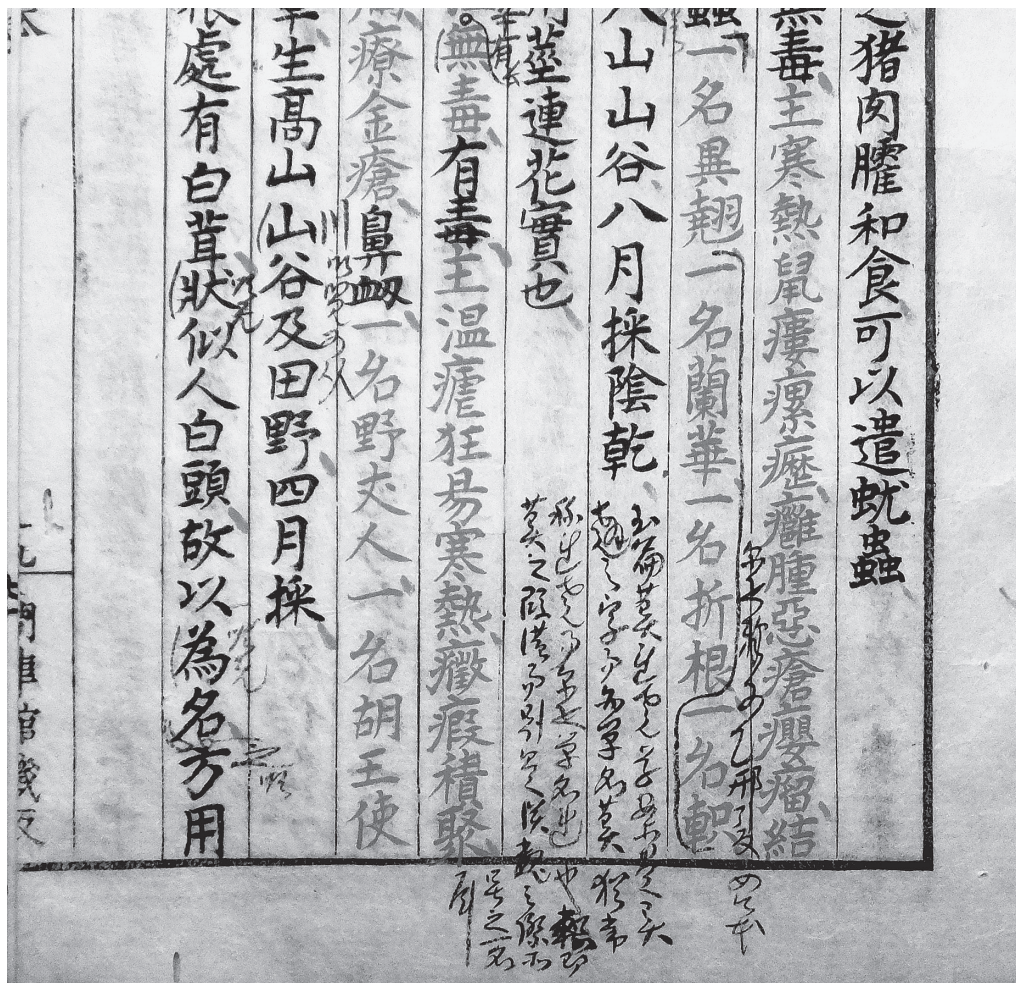
『本草經集注』第2次稿本（森立之手稿本）

第1巻（第1冊）の巻首部分（第2葉） 版心最下部（写真の左下隅）に「井口榮春書」とある。

の集大成的な著作は、森立之が編纂した『神農本草經』である。『神農本草經』の刊行は、嘉永7年（1854）であるが、その数年前に小嶋尚真らとともに『集注本草』の復原、校勘を行っている。岡西家からの寄贈書は、その稿本の1つである。

全7巻の7冊本で、巻1の首頁（第1冊第2頁）に「井口榮春書」とあり（上図参照）、第2，3，5，6，7冊の末葉（各巻の巻外空白頁）には矢島玄純、塩田敬斎、森約之（立之の長男）、井上栄三が本文を書写し終えた旨を記す自筆サインがある。巻4の第4冊にはそのような記入はないが、岡西博士による「集注本草解題」（南大阪印刷センター刊影印本の附録）第8頁によると、筆跡から井上、塩田両氏の書写とする。また、巻2には井上だけではなく、井口、矢島、塩田3氏の筆跡が混じっていることを指摘する。署名蘭には書写終了の年月を記すものがある。すなわち、「嘉永辛亥極月初七日（引用者注：嘉永4年12月7日）」（第3冊末葉）、「嘉永辛亥歲初冬念六日（引用者注：嘉永4年12月26日）卒業」（第5冊末葉）、「嘉永四辛亥載六月哉生魄（引用者注：嘉永4年6月16日）於懷仙樓寫終」（第7冊末葉）とあり、それによって嘉永4年（1851）後半期に分担して書写したことがわかる。また、場所は曲直瀬家の懷仙楼であった。

毎冊の冒頭には「森氏」の捺印があり、文中や欄外に森立之・約之父子による書き入れが多数なされている。第2冊の末尾には「壬子二月十三日甲子（引用者注：嘉永5年2月13



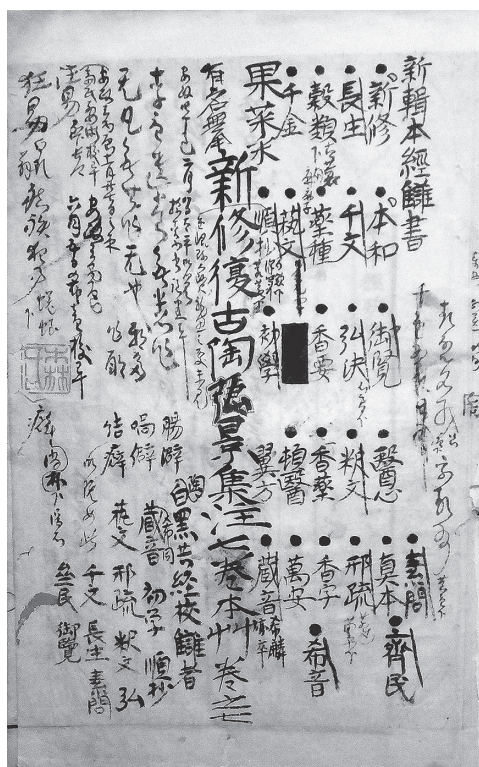
同書 第5巻（第5冊）の第21葉（最初の2頁を含めた頁数）の一部

版心の下方に「問津館蔵版」とあるが、森立之編『蘭軒医談』の版心にも「問津館蔵」とあり、森立之家蔵本のなかに「問津館」の蔵印が見られるので、「問津館」は森立之邸の呼称と思われる。

日)」に校了したと記すので、森立之が嘉永4年書写本を用いてさらに検討を加えた手稿本と考えられる。

国会図書館には本書とは別の稿本が残っている（その写本が杏雨書屋にある。未見）。これも、森父子や井口を含む大勢の人物による書写本で、小嶋尚真の手定本とされる。嘉永2年8月22日から嘉永3年9月1日までの期間の校了の署名があり、岡西旧蔵本よりも古い。また、各頁に書き込まれた多数の朱書きの校訂は岡西旧蔵本に反映されているので、国会図書館本が初稿本であり、それを用いて諸書の引用文との校合作業を繰り広げた後、改めて浄書した第二次稿本が岡西旧蔵本ということになる。これらの未定稿は、最終的に整理され、完成版が作られた形跡はない。岡西博士は、その中断の要因は、森立之が『集注本草』から4巻本の『神農本草経』を遡及的に復原することを究極の目的としており、その復原本の完成と『本草経考注』の作成のほうに専念していたためと推測している。

ところで、医学館を中心とする幕末の医薬学研究の成果は、近代日本の医薬学に受け継がれたとは言い難い。しかし、駐日公使の何如璋の随員となって来日した楊守敬（1839-1915）などの中国知識人によって大陸にもたらされることで大きな輝きを放った。楊守敬



同書 第7巻（第7冊）第1葉の冒頭部分
校讎（校合）に用いた文献リストを記載する。

は、中国すでに散逸した漢籍が日本に残存し、それに基づくすぐれた学問を発展させていることに大いに驚嘆した。そして、4年間の滞在中に何如璋の後任の黎庶昌と協力して、膨大な量の典籍を蒐集して中国に持ち帰った（現在は北京図書館&台湾故宮図書館にある）。入手した書籍のリストは、『日本訪書志』（1897）にまとめている。図書の蒐集には、森立之（1807-1885）が相談役を務めており、岡千仞などの東京図書館関係者も協力したとされる。

医書については、安政版『医心方』に強い関心を示し、版木の購入を森立之に申し出たことが、森立之の『清客筆話』（慶応大学斯道文庫蔵）に記されている（版木の一部は、東京大学総合図書館に残存する）。それは実現しなかったが、新刷りの『医心方』6部を調達してもらっている。また、多岐家の医薬書15種の版木を400円で購入し、帰国後に『聿修堂

医学叢書』（1884、〔素問識〕『難經疏証』『傷寒論輯義』等の12種+小坂元祐『医穴纂要』）として公刊した。

中国に渡った『医心方』や多岐元簡等の医薬書は、中国知識人に江戸の医学研究の水準の高さを知らしめる役割を果たした。魯迅が『嵇康集』を校正した時に、『医心方』巻27の引用文に論及するのがその傍証であるだろう。楊守敬が日本にやって来たのは、明治13年（1880）である。その頃、明治政府は、西洋科学一辺倒の立場を取り、幕末の東西融合的な自然科学の試みをばっさりと切り捨てようとしたために、鍼灸医術や漢方薬は廃絶の道を歩もうとしていた。ところが、日本社会の近代化を視察に来た中国人が江戸に開花した伝統医療の遺産を発見するのは、実に皮肉なことである。

森立之の『神農本草経』を絶賛したのは、葉德輝（1864-1927）である。彼は、『医心方』巻28、房内篇に引用された房中術の専著（『素女経』『玄女経』『洞玄子』『玉房秘訣』『玉房秘訣』『玉房指要』など）の佚文に依拠してその復原を試み、1907年に刊行した『双梅景閣叢書』に収録した。日本では、房内編が卑猥であるとして、『医心方』を発禁扱いにしている。森立之達が苦労して復活させた『医心方』や古本草書に対する両国の評価は、見失われた古典と淫らなボルノほどにかけ離れていたのである。その眼差しの差異が、日本の伝統医療文化の衰退を象徴しているように思われる。



2

さて、森立之の旧蔵書の一部は、明治30年代中頃に訪日した羅振玉が古書肆より購入した。『羅氏振玉蔵書目録』には、多数の日本書を著録するが、鈔本類の子部には「本草經集注草稿本 7本 日本森立之輯陶弘景集注有森氏印有」とある。それが、人文研に寄贈された岡西旧蔵本である。それというのも、羅氏の没後の昭和17年（1942）2月に孫の羅繼祖より岡西為人に譲渡されたのである。

当時、羅繼祖は満州医科大学予科の講師であり、岡西は同満州医大の東亜医学研究所に勤務していた。譲渡の経緯について、岡西は自ら羅振玉の蔵書中の医書を大学に譲り渡した際の「謝礼」として研究所にプレゼントされ、図らずも岡西の書架に入るようになった並んだと語っている。岡西は、羅振玉が本書を所蔵していたことはよく知っていた。というのは、羅振玉は大正4年（1915、日本に亡命中）に敦煌石室で発見された『本草集注序録残卷』（龍谷大学現蔵）の写真を小川琢治からもらい受け、影印して『吉石齋叢書』初集中に収めて刊行したが、その跋文に本書の存在を言及した。岡西は、『新修本草』の復原に取り組んでいて、敦煌本と校合しようとして羅振玉の跋文を興味津々で読んだ。だから、喉から手が出るほどに欲しいお宝であり、きつとりクエストしたにちがいない。つまり、それを譲り渡された時の感激が「謝礼」という表現に潜んでいるのである。

『新修本草』の復原は、『宋以前医籍考』とともに岡西のライフワークと言えるものである。初稿が完成したのは1940年10月、重輯本が1941年8月であり、羅氏から『集注本草』が贈られたのはその直後である。重輯本の序文では、本草書復原の研究史を略述する。最初に試みた先駆者には狩谷掖斎（1775-1835）を挙げる。掖斎は、『証類本草』の白字文を『新修本草』の順序（『千金翼方』『本草和名』からの推定）に配列した『神農本草経』を編纂した。それから森立之の復原本が成立するまでに、2つの特筆すべき事績があったとする。1つは、天保年間に狩谷掖斎、浅井紫山、小嶋宝素等が『新修本草』の古抄本を京都（仁和寺、福井家崇蘭館等）で見つけ出したことから、小嶋宝素が欠巻を復原したこと、もう1つは嗣子の小嶋尚真が森立之、曲直瀬正貞とともに前述した『集注本草』の復原作業を行ったことである。さらに、明治維新以降については「世を挙げて西欧文化の吸収に狂奔し」と皮肉めいた言い方で、和漢の古書は反古と同一視されることになったことを嘆く。しかし、明治22年（1889）にアメリカ帰りの日本を遊歴した清の武官、傅雲龍によって小嶋尚質・尚真の復原した巻3を含む『新修本草』11巻（巻3-5、12-15、17-20）の影写本が見出され、はじめて『養喜廬叢書之二』として日本で刊行されたこと、昭和11年（1933）に仁和寺秘蔵の古抄本が中尾万三の解説を付して本草図書刊行会から復刻されたことに論及する。自らの口から言わないが、岡西は狩谷掖斎から中尾万三に至るまでの先駆の業績を踏まえてまさに古本草書の復原プロジェクトを集大成したのである。まさに、本草学研究の金字塔と評することができる。

しかしながら、岡西の偉業やお宝が公刊され、日本医薬学における本草学研究の基盤が確立するのはもっと後になる。『新修本草』については、初稿本、重輯本の完成の折には



岡西為人編『重輯新修本草』自筆草稿

向かって左の大冊が巻首から第12巻まで、右の小冊が巻13から巻末までの稿本。

出版に至らなかったが、1943年11月には重輯本で附録しようとした概論等の研究論文だけを「新修本草の考察」と題して単行本として出版することになり、全篇校正を終えて一部は刷り上がっていた。しかし、終戦の騒乱に遭って、すべて烏有に帰したようだ。ただし、原稿だけは焼け残った。それが、岡西家から寄贈されたもう一つのお宝、『重輯新修本草』自筆稿本にほかならない。

これが今日に伝存したことには、大きなエピソードがある。岡西は、終戦後もそのまま瀋陽医学院（満州医科大学を改称、1948年に中国医科大学へ合併）に留用され、すぐには帰国できなかった。昭和23年5月12日にようやくアメリカの貨物用飛行機の帰路便に乗って北京に移動し、しばらく滞在した後23日に塘沽から船で出港し、28日に佐世保に入港した。飛行機に乗る際に、1人当たり体重を含めて90キロまでという重量制限があり、蔵書や研究資料はすべて置き去りにするしかなかった。しかしながら、羅氏から頂戴した『集注本草』7冊とライフワークの『重輯新修本草』上下冊だけはリュックサックに入れて持ち帰った。重量をできるだけ軽くするために、所持金も5000円札に両替して枚数を減らし、子供の腰にも巻き付けて運んだようだ。『重輯新修本草』の下冊（巻13以下）は、特注の大きな原稿用紙の余白がすべて切り取られていて、上冊の半分しかないのは、その時の重量調整の傷跡である（写真4参照）。

そのような苦心を経て、重輯本の刊行が実現するのは、昭和39年（1964）4月のこと、しかも出版社は国内ではなく台湾の国立中国医薬研究院である。マイクロフィルムで原稿を送付したのは昭和34年3月だから、それから出版までに5年も要している。しかも、原文は神農本草経の経文を朱書きした2色の浄書本であるが、朱色を傍線にした単色刷りで、「新修本草の考察」に関しては一部をカットした簡略版だった。それが完全な形で出版に



漕ぎ着けるのは、逝去されて5年後の昭和53年（1978）4月までかかった（出版社は学術図書刊行会）。この再版本は、塩野義研究所の後継者である赤堀昭氏の尽力で台湾本でカットされた論考を補い、本草薬名総合索引を附録するなど、すぐれた出来映えであるが、本文を原寸大ではなく、4分の1にしたことだけが瑕疵である。

一方、『集注本草』の手稿本が影印されるのは、その前年の1972年2月である。それは縮印版だったが、1973年2月には実寸大の帙入線装本も出た（いずれも出版社は南大阪印刷センター）。この原寸影印本は人文研書庫3階に配架されていて、典拠調べに見やすく便利なので愛用していた。ところが、寄贈書を頂戴に岡西克人家を郭秀梅女史と訪れて初めて本書を実見した時に、何かしら違和感があった。術数学会で班員のみんなに見せたところ、誰かが縮小版の欄外注が実物通りに映っていないことに気づいた。文字が見えやすいようにサイズの手直しが施されているのだ。それに巻2の末葉にある筆録者のサインが縮小版にはなく、2頁の余白になっている。そのような余白頁は原書をひっくり返してもどこにも見当たらない。怪訝に思って翌日に書庫に入って実寸影印本とも比べてみると、明らかに実物のほうが大きい。稿本の縦の長さは上辺に別の紙を継ぎ足して31cmあまりあるのに、実寸影印版のほうは28cmを満たない。偽物が自ずと萎縮したわけではあるまいが、わずかな余白の大きさで、その風格に雲泥の差を生じてしまっているのだ。そこで、影印本が出回っているにもかかわらず、デジタル写真のWeb版を作成することにした次第である。しかしながら、本物そっくりの影印本やデジタル画像によって閲覧できても、やはり本物を手にしないと文献考証の醍醐味は味わえないことを附言しておきたい。

日本の医書、本草書の大陸への環流現象は、漢籍受容によって日本文化を築き上げたことから言えば、ある意味では誇らしいことであったのかもしれない。しかし、同時に江戸の頭脳集団が生み出した文化的遺産が明治以降の近代化路線においてはまったく無視され、打ち捨てられてしまったことは、実に嘆かわしいことである。その唯一の例外は、人文研に寄贈されたこの2書をめぐって成し遂げられた岡西為人の本草学研究なのである。そのように考えれば、『集注本草』森立之手稿本は、羅振玉を経て最もふさわしい人物の手に帰着したと言えるだろう。しかも、そこで『新修本草』復原本との出会いがなされたことは、江戸の医学的伝統にとってきわめて幸運なことであると同時に、岡西為人の偉業においては偶然中の必然であるように思える。

なお、岡西為人博士の生涯や業績については、2010年04月に郭秀梅女史が岡田研吉氏と整理して再版した『宋以前醫籍考』上下冊（学苑出版社）の下冊附録「紀念岡西為人」に詳述されている。上冊には多くの写真が掲載されているが、それらの資料も郭女史を経て科学史研究室に譲り受けた。また、岡西博士の人となりは、森村謙一氏の寄稿文をあわせて参照してもらいたい。（人文科学研究所教授）

【特別寄稿】

人文研科学史家略伝(1)～(3)

森村 謙一

第1回 岡西為人

(1) 略歴

岡西為人博士の真骨頂は、稀有の実際家でありながら前人未踏の大業・中国医薬史分野の体系化を具現されたことにある。

お若い時期に朝鮮半島及び中国大陸へ渡り研鑽と医療実務に励まれ、現地医科大学の専門・教育体制に在職され、当時現地に蔓延していた所謂大陸病やそれぞれの地域の風土病を、広範囲に亘り継続して診療し、研究された。

中国医薬学の歴史はまことに長大、西暦紀元前(B. C.)の伝説の五帝・黄帝、顓頊、帝嚳、堯、舜の時代に既に医薬理論と実際体系が成立し、その多くが2000年を経て現代にまで延々と受け継がれ発展して今日に至っている。大陸内で活用されて来ただけではなく四方へも広まり、東方・日本へは沖縄群島～南西諸島沿いに海を越え、或いは北回り～朝鮮半島を経て、繰り返し伝播し受容され、夫々の地域に同化しながら根を張って来た。媒体として医書、本草書等の専書が多種多様に渡来し、内容を本邦向けに修正改編して珍重されただけでなく、医師、薬師、本草家といった専門家の渡来・帰化も再々有り、逆にこちらの若い人が公的或いは私的に留学し、かの地に長年月滞在し、先進医薬学を深く学んだ事例も多い。岡西為人博士はまさにこの日中医療医薬交流・近代～現代史の象徴と目されるお一人である。にもかかわらずお人柄は極めて地味で、長年に亘る京都大学人文科学研究所東方部・東アジア科学技術史研究班の会合に於いても、空前絶後とも言える上記・ご経歴を誇る気配は微塵も無く、控えめに静かな態度で終始された。岡西博士が、まことに几帳面なご性格であったことは、遺されたご自作の『著作目録』(別添)を観ても判る。実にキチンとした造りになっている。

(2) 『岡西為人著作目録』略解

岡西博士が晩年に大著『中国医書本草考』を上梓され、京都大学人文科学研究所東方部・東アジア科学技術史研究班の会合席上・その実物をご自分で披露された際に、この目録を大著の一部として始めて拝見した。その書を左から開き、p. 73～p. 86が当目録である。この書は、カバー表紙の「書題」から始めて、当目録も含め643頁に及ぶ本文の全てが、独特の気品を放つ隸書活字で印刷されている。微小字に至るまでの全字各々、典雅な毛筆書体で、岡西博士の徹底した細やかな心配りが感じ取れ、当目録は単に書の内容を事



務的に示す体言止め短文の羅列ではなく、僅か二頁ではあるがそれ自体の高い品格を示している。さらに内容的には、書体の大小厚薄如何に関わらず1点を一行で表わし、各個に書物としての具体的体裁が多様であっても、敢えて当該書籍個々の実物を並べ揃え比較しなくても当目録を観るだけで判別し易いように、その各々を、単行本は◎、単行本に採録または附載のものは○、筆名・根淵竹孫のものは「・」、筆名・竹孫、竹孫生、孫又は孫生のものには「・・」、筆名・NC、生のものには「…」を、それぞれ行頭に冠してあり、関連分野の他書の一部或いは雑誌記事として書かれている場合は、その母書或いは当該雑誌を明記してある。

(3) 青壮年期及びそれ以後の岡西為人博士

岡西博士について語る場合、東アジア医療医薬史以外にもう一点・仏教大門西本願寺大谷家との関わりにも言及しなければならない。岡西博士は、兵庫県の仏教中学校に学ばれた少年時代から仏門に縁を持たれたが、大正十年(西暦1921年)・16歳の時、同学校主・大谷光瑞師の命により朝鮮を経て中国に渡り、彼の地(主に東北部)で長年に亘り研鑽され、医書本草書等の医療古典にも通曉し、また医療実務に励まれた。日本へ帰られたのは昭和20年(1948)・50歳の御時であった。その間・満州事変～太平洋戦争～日本敗戦・・・と、東アジア全体の政治社会情勢が激変してゆき、めまぐるしく変転する現地状況への対応苦労は大変なものであっただろうが、終始、仁術の道の高度専門家として遇されておられたようである。

帰国後、塩野義製薬研究所に入られて生薬関係の研究を継続され、また京都大学人文科学研究所東方部・東アジア科学技術史研究班の会合に常時出席され、深いご造詣により共同研究に多大の貢献をなされたが、この間の御業績については当該研究班研究報告書も出ているので、当稿で詳しくは言及しない。

(4) 岡西為人博士・古典籍研究の中心点と業績

上述のように、御業績は東アジア伝統医薬・実践と文献検討の全般に亘りまことに広範囲であるが、岡西為人博士御自身が生涯を通じ最も努力を注いで来られたテーマは、古代～中世～近代と伝えられて来た「中国本草体系の復元」でありその纏めが名著『医書本草考』であった。この偉業の中で更に核心的存在と目して整理編集してゆかれた古典が、唐代『新修本草』であり、それは別途『復元本 新修本草』として見事に具現された。実際には、この唐代『新修本草』そのものは唐朝滅亡及びその後の政治、社会混乱で亡失したが、幸い、十世紀～十二世紀・北宋、南宋 両時代に編集し直され、新しく『証類本草』各版本として生まれ変わり後世に伝えられている。岡西博士は、この『新修本草』こそ、凡そ東アジア医薬古典の真髄であると確信し、上記・『証類本草』各版本及びその他の伝承本に断片的に挿入されている句文を元に、復元本編集の努力を続けられた。

さらに、東アジア古典籍全般に通じる特徴として、一つの古典は必ずその前の時代に母体となる古典が在る・言い換えれば古典の内容は必ず次の時代に継承されて行くのが鉄則で、当『新修本草』の母体としては、根源的に西暦紀元前六世紀初頭・南北朝、遼代の

『神農本草経集注』が知られており、その帛書断片も出土しているので、岡西博士は努力してこの『神農本草経集注』復元稿本・遺本を探索検討し出版され、解説（南大阪印刷センター刊『集注本草』、1971～72）も遺された。

第2回 篠田統

“天衣無縫の快漢” 偉大なる先学にこのような碎けた呼称を奉るのは失礼であるが、ご本人は、生前いつもの人懐っこい童顔に微笑を湛えて「いいよ、いいよ」と許容して下さりそうな気がする、それほどに温和で包容力あるお人柄であった。驚くべき知識の奥行きと幅の広さ・それがその時々に必要なに応じてさらりと適切に示され、街学臭を少しも感じさせない・典型的な「大人の学者」であった。

（1）略歴

経歴は以下の三期に大分け出来る：

- (1) 青年時代・京都大学理学部では学部で先ず化学科，大学院で動物学科へ進み，卒業後，大正15年（1925）～昭和3年（1928）の間・ヨーロッパ（主にオランダ）へ留学された時期。
- (2) 帰国後10年を経て，日本陸軍技師となり，大陸・中国東北部等で従軍し，実務に励まれた時期。
- (3) 終戦後，抑留生活を経て日本へ戻り教職に就き研究と教育に従事され，昭和40年に退職されるまでの時期。

京都大学人文科学研究所東方部東アジア科学史研究班への関わりは，上記(3)期，及びそれ以降に，藪内清教授及び後任・山田慶児教授が同研究班を主催された間に継続参加され，極めて広範囲の知見披露及び意見具申等，多大の貢献があった。

当該研究会の席上及びその他お付き合いの機会では，冒頭に表現したように何時も慈顔で飾り気ない態度を保っておられて，知見披露や意見具申はごく判りやすく，茶目っ気というか，ユーモラスな感じも持たせて表明されるのが常であった。

例えば，ヨーロッパ白人の体格が日本人と比べて大きいことを「ドアのノブが目の前・水平の位置だよ！」と言いながら人差し指をご自分の眉間から突き出して表現されたり，彼の地に到着した始めに，服を買おうと商店の売り場へ行かれた際のご感想が，「大人服の売り場ではダメ！ サイズが（大き過ぎて）全く合わない！」。その後は「子供服売り場へ直行だ！」と言っておられた。（岡西博士自身のご体格は当時の日本人として小柄ではなく，むしろやや大柄であった。）

すなわちこの「体格差」・一般的に日本人の体格がヨーロッパ白人のそれに比して劣ることが各個人の活動能力の差となり，国家社会の力量の差をもたらすので，その点を今後改善してゆく必要があると痛感されたことが，後に「食物学」に専心して行かれた主因の一つである。僭越ながら篠田博士流の表現を採れば，「食いもんが違うたから，活動力が違うた。日本人のこの弱みを改めなあかん！」である。ちなみに，上記・ヨーロッパ留学



時の体験以外に帰国後大陸へ赴かれた際の観察でも、中国の北部、東北部の遊牧民は山羊・牛馬の乳や肉等、動物性蛋白質を多く摂食していて体格が良いが、中部以南（華中、華南）の農耕民は、そうした大型の家畜を労役には使うが、その肉や乳を常の食用にはしないので、人々の体格は小柄であると、再々話しておられた。

(2) 業績

篠田博士の学問には、次の三大特徴が有る。

- (1) 間口の広さ・上記ご経歴から判るように、基礎化学から東アジア住民の生活面に及ぶ・極めて広範囲の見聞と実際体験が基盤となっていたこと。—ご自分での表現・「私は色々やって、とうとう終いに“食いもん”の専門家になってしまった」。
- (2) 古典に通暁・所謂「正史」から、一般的ではない地方史・専史に至るまで、目を通していてその記憶が確かで、研究班会合等の折、その都度その場に応じた適切な知見を出された。
- (3) 実際面の裏付け・文献に拠って論じるだけではなく、具体的把握力が強く、実物とその処理面をよく覚えておられた。

第3回 北村 四郎

(1) 略歴

京都大学理学部植物学科の出身で、同学科の植物分類地理学教授を長く務められた。関西の裕福な家庭で育ちになったと御本人から聞いた記憶はあるが、昔は旧制度の大学院の在籍が長引き勝ちで、北村博士も院在籍は長かったらしく、「月給を貰えない生活なので、世間・友人間で肩身が狭かったよ。」と、私たち同学科所属学生に洩らされたことがあった。

植物学科の学生は、植物分類地理学だけでなく、同じ学科の植物生理生態学や植物細胞学も充分に学ぶこととされ、そうした多くの学習のために、卒業までに殆ど毎日・午後全部等、実習に充分時間を掛けて励む必要があり、一方、教授は植物学各専攻分野で1人ずつだったので、そうした学生実習指導は助教授や講師、助手といった部下のスタッフに任せ切りの教授も居られたが、北村博士はこまめに直接指導に当って下さった方である。

北村博士は気取らないお人柄で、講義は判り易く、植物学科の学生だけでなく、同じ理学部の動物学科や、農学部等の学生も聴講していた。実習の時は、冗談や柔らかい話題も交えて指導して下さいだったので、学生間に人気があった。北村博士は分類地理学の内でも顕花植物（開花結実して増える高等植物）・その中でも最も高等なキク科植物を主に研究しておられた。

誰しも・種類数多（あまた）な地上植物の中で何故キク科が最も高等と目されるのかと疑問を持つが、北村博士は実習指導の際、凡そ何処にでも自生しているタンポポの、花が咲き終わり小さな綿帽子状に稔っている穂をチョイと摘み取り、口許へ寄せてプツと吹き、羽毛の傘が付いた微小種子が風に乗って忽ち四方八方へ飛散してゆくのを指して「ホレ、

この殖えかたや！ この殖えかたが、最高なんだ！」と言ってニコッとされた。

（２）研究視野の国際性

植物個体は自ら移動することが無く、発芽生育したその地域固有の自然条件（温度、水分、日照 等）に強く規制されて生存している。一方、世界各地域の自然条件は各々独特で、各地域にはそれぞれ異なる種類が主となった固有の植物相が存続している。

日本列島は亜熱帯から亜寒帯まで長く延びており、国内各地域植物相の固有性が顕著である。従って、日本の植物分類地理学者には、国内分研究だけでも実は大仕事であるが、北村博士の研究範囲は国内分研究に止まらず海外、アフガニスタン、パキスタンの地にまで及んだ。近隣の朝鮮半島や中国の植物にも関心が強く、同じ京都大学内・人文科学研究所東方部東アジア科学技術史研究班の共同研究に早くから参加された。

北村四郎博士の仕事の大部分に多大の協力をされた方が村田源博士である。北村博士には共同研究者、協力研究者は大学内外に数々居られたが、村田源博士は各地調査研究にも同行され、格別深い関わりが有った。村田博士は一旦学校教師として世に出られた後、植物学教室に専属勤務されるようになった由であったが、昭和30年代始め（筆者が理学部に入学し、教養部での勉学を経て学部へ上った頃）には、村田博士は当時の理学部植物学教室事務室横の小部屋に一人居られ、教室の各部屋の鍵や部品を管理し教育諸務を執り仕切っておられた。例えば、上記・北村博士の講義や実習室内での実習で、北村博士が題材植物の実物を学生に観察させる必要を感じると、前以って或いは講義、実習指導最中でも、実物を採って来るよう村田博士に依頼された。教室建物から200メートル程離れて「理学部植物学教室附属植物園」が在り、村田博士は其処で目的の植物実物を採取されたが、急な依頼でも、行って正確に採って帰って来るのがとても速く、学生達はその速さに驚いた。上記植物園内の何処に目的植物が在るか・完全に頭に入っていないとその速さは無理と思えた。ちなみに、この「京都大学理学部植物学教室附属植物園」にはその後、同学部・物理学教室出身ノーベル賞受賞記念館やその他の建物が設立され研究用植物を植栽する為の敷地はかなり減っており、植物園としての存続さえ危ぶまれている。長年、専属の園丁職が常駐し保全に努めて来たが、この職も削除された由。凡そ植物は、人間の文化のあらゆる領域で関わって来ている重要な自然物であるから、その関わりの研究を軽視、無視する方向の変遷はあってはならない。（大阪府立高校元校長・薬学博士）

『史記正義』30巻は『史記』三家注（集解・索隱・正義）の1つである。唐開元年間に張守節が著した『史記』の注であるが、唐以前の佚書を多く引用するばかりでなく、地理や字句の文義に詳密である。本書は三家注を初めて合刻した南宋黄善夫刊本の『史記』をもって流布したが、合刻時に『史記正義』は他の二家注と比較して分量が多かったためか刪節され、2,000条余が散佚した。しかしながら、刪節の憂き目にあったはずの『史記正義』佚文は日本にて久しく連綿と伝写されていた。

この『史記正義』佚文を収集して最初に公刊したのは、瀧川龜太郎博士（1865-1946）であり、その1,418条を『史記会注考証』10巻（1932-34）に収録したのである。その後、『史記正義』佚文の収集と校訂は水澤利忠博士（1918-2013）によって引き続けられ、瀧川博士の1,418条に新たに見いだされた227条を加えて、『史記会注考証校補』9巻（1956-61）に採録された。

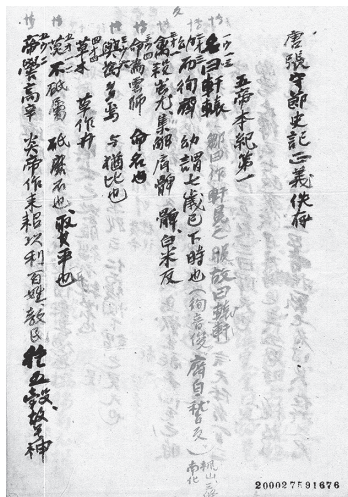
この業は縁あって筆者が引き継ぎ、瀧川・水澤両博士が収集した1,645条にさらに筆者が見いだした29条を加えて『史記正義佚存訂補』（水澤利忠編『史記正義の研究』所収、汲古書院、1994）としてまとめた次第であるが、これを可能ならしめたのは久しく行方不明となっていた瀧川龜太郎博士手録の『史記正義佚存』2巻の出現であった。

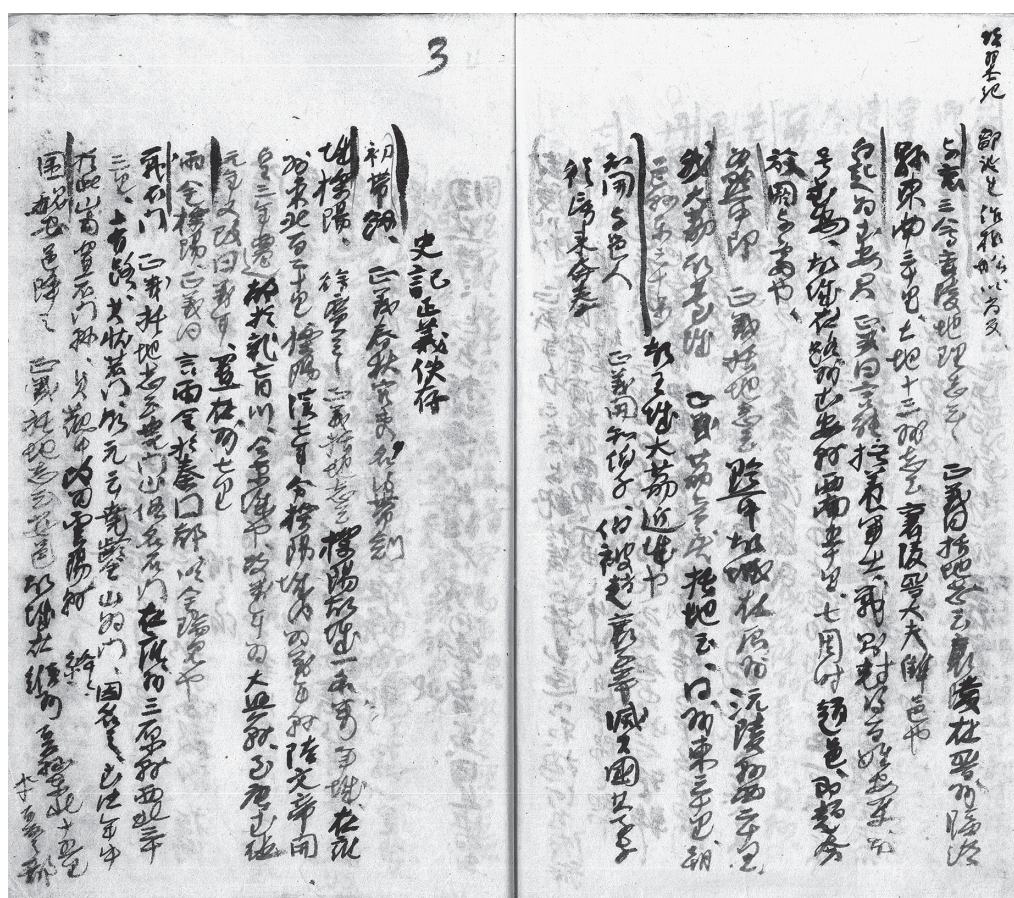
瀧川博士が1910年（明治43年）頃、金沢へ旅行された際に前田家の書庫の中で目にした『博士家本史記異字』の中に『史記正義』佚文の「書き入れ」を認められてから80余年の星霜を経て、典拠史料30種により『史記正義』佚文は1,674条（瀧川1,418+水澤227=『校補』1,645條；『校補』1,645條+小沢29=『佚存訂補』1,674條）を遂に収集

人文研アーカイブス (20)

『史記正義佚存』

瀧川龜太郎博士手録 2冊
小澤 賢二





し得たのである。

筆者はその後、『史記正義』佚文を含めた日本平安朝博士家の史記説などを豊富に「書き入れ」として所載してある「南化本史記」（南化玄興旧蔵・直江兼継旧蔵・上杉治憲旧蔵を経て現在国立民俗博物館蔵）などの系統を究明し、『国宝 史記』（全12巻、1996-98、汲古書院）の解説で詳述したが、本書はその公刊によって相当部数数が漢土の公的図書館にももたらされた。このため戦前より一部の中国人研究者間で燻っていた「南化本批判（＝史記正義佚文批判）説」が、瞬く間に払拭されるに至った。

いっぽう、畏友である袁伝璋（安徽師範大学文学院教授）は瀧川・水澤そして筆者に及ぶ『史記正義』佚文収集を肯定的に評価するとともに、自らは宋代の文人が残した著作に引用される394条の『史記正義』佚文を新たに收拾し、これを「宋人著作五種徴引『史記正義』佚文考索」としてまとめた。

このうちの24条は瀧川が蒐集した佚文と重複していたことから、新発見の佚文は370条といえる。袁がこの作業を了えたのは、筆者の『史記正義佚存訂補』上梓から20年後、瀧川が『史記正義』佚文を初めて目にしてから実に100年の星霜を経ていた。

すなわち、日本の学者3名と中国の学者1名によって『史記正義』佚文は都合2,044条を収集することができ、『史記』三家注として合刻された際に刪節された『史記正義』は概ね旧来の姿に復されたものと解せられる。

本論考は『史記正義』佚文は具体的にどのような資料であるのか、そしていつ日本に舶



載され、いかなる経緯をもって伝写されていったのかを先ず述べるとともに、瀧川博士が手録した『史記正義佚存』の資料的価値について、その概要を述べてみたい。

- (1) 『史記会注考証』(10巻, 東方文化学院刊, 1932-34, 同再刻: 史記会注考証校補刊行会刊, 1956-60, 同排印: 文学出版社刊〔北京〕, 1955)

瀧川博士は『史記会注考証』10巻を上梓し、1,418条もの『史記正義』佚文を採録した。『史記会注考証』の原稿はB6版の鳳文館本『史記評林』の欄外や行間に夥しい『史記正義』佚文などの「書き入れ」を朱色のペン字インクで施したものである。この原稿を基盤にして、瀧川博士は短期間で完全原稿の体裁を整え印刷所に入稿したのである。

厳密にいうと、この完全原稿とはB5版のスクラップブックの見開きにB6版の鳳文館本『史記評林』を半葉ごとに裁断して糊で貼付したものであり、当該『正義』佚文各条はスクラップブックの余白に瀧川博士自筆の朱色のペン字インクで記され、更にこれは同じ朱色のペン字インクの直線をもって挿入すべき該当の注文箇所を指摘している。

龐大というべき『史記会注考証』10巻が、執筆から僅か3年という極めて短期間で刊行できた背景には上記のような原稿作成に省力化を図った点が認められ、瀧川龜太郎(資言)博士の『史記会注考証』と並び称される池田四郎次郎(蘆洲)氏の『史記補注』10巻が刊行に手間取ったというのも、後者の原稿が全て自筆であったということに尽きる。

筆者はこれを水澤利忠博士の自宅(前橋市)1階にある開架の書棚にて実際に見たことがある。記憶によればその最上段にくだんのスクラップブックが3冊あるいは4冊立てに掛けられていた。筆者はこれらを『史記正義の研究』を刊行する際にその一部を写真にて掲載しようとした。だが、筆者がこれを撮影しようと水澤宅に行ってみると全てのスクラップブックは忽然として姿が失せていた。

そこで筆者は、水澤博士に「どこにいったのですか?」と詰め寄ったのだが、水澤博士は「自分にもわからない。私は持ち出したりしなかったのだが、気がつくともなくなっていた。」と答えに窮してしまった。こんなことならばもっと早くコピー機で複写をしておけばよかったと今も悔しさがつのる。

後日聞いた話では、往時水澤宅には文教大学の学生である某という人物が出入りしていたとのことである。状況証拠からすれば持ち出したのは、この人物しか考えられない。もし彼がこれを無断で持ち出して、今日に至っているのだとしたら返還してほしい。

なお、瀧川博士は『史記会注考証』巻10「史記総論」中の「史記鈔本刊本」という条の中で「以金陵爲底本」とし金陵書局本を底本としたことが記されているが、これに関しては筆者はその資料を確認しておらず疑義が有る。恐らくは初稿ゲラもしくは再校時に金陵書局本と対校したのではないかと推察する。

瀧川博士は当初『史記会注考証』に採録する『史記正義』佚文とは、東北帝国大学図書館狩野亨吉文庫収蔵の慶長寛永年間刊(8行有界本)の古活字印本『史記』の欄外に記されているものを用いたが、刊行の途中で『幻雲史記抄』や『博士家本史記異字』などにも同様の『正義』佚文があることを確認し、これらの佚文も『史記会注考証』の『正義』各条下に組み入れることとしたのである。

なお、1956-60年に下って同書は、史記会注考証校補刊行会が排印（写真影印）したとされているが（『史記会注考証校補』巻9，251頁），実際には排印でなく初版時に作製した『史記会注考証』の紙型を用いて再版したものである。なお、その際に一部の誤字を訂正した箇所がある。

なお、水澤博士から伺ったところでは、その紙型は東京大学東洋文化研究所の天井裏に保存されていたが、再版後はまた紙型を作成に元の場所に保存されたという。

（2）『史記正義佚存』（2巻，瀧川龜太郎博士手録）

瀧川博士は『史記会注考証』10巻「総論」中に「史記正義佚存」という条を設けている。要約すると概ねその内容は次の如くである。

「私は三家（すなわち錢大昕・錢泰吉・張文虎）の著録を読んで、いよいよ三注（集解・索隱・正義）合刻刊本に収録されている正義に刪節の多きことを知った。偶々、東北帝国大学図書館狩野亨吉氏旧蔵の慶長寛永年間刊の古活字印本『史記』の欄外に正義佚文が1,200乃至1,300条ほど書き入れられていることを見出したが、それらはみな三注合刻刊本には記載されていないものばかりであった。後日、『幻雲史記抄』や『博士家本史記異字』などにも同様の『正義』佚文があることを確認し、改めて東北帝国大学の古活字印本『史記』の欄外に書き入れられた由来するところを知り、まさに欣喜措く能わずの心境となった。それゆえこれを手録し2巻となし、題して『史記正義佚存』と名付けた」（原漢文）。

この瀧川博士自筆の『史記正義佚存』2巻は、書名こそ著名であるものの長くその実態が明らかでなかったが、巻下は瀧川博士の歿後になって古書肆を経て長澤規矩也氏の所有に帰し、長澤氏の好意によって水澤博士のもとに贈られたものである。

また巻上も久しく所在不明のままであったが、1991年東京の西落合にあった瀧川博士の旧宅を取り壊す際に奇しくも旧書庫から発見され、乾坤を分かっていた本書が揃うことになった。そこで早速筆者が精査したところ、その記せる『正義』佚文は『史記会注考証』に収録されているものとは必ずしも一致しないことが判明したのである。

すなわち、水澤利忠博士の『史記会注考証校補』に新たに増輯されたとされる『正義』佚文227条のうち、已に108条が『史記正義佚存』に収録されていたばかりでなく『史記会注考証校補』に未収の『正義』佚文7条さえも引用されていたのであった。

留意すべきは、当初から『史記正義佚存』2巻に採録された「佚文正義」をベースに、『史記会注考証』10巻全てに「佚文正義」が挿入されていたわけではないことが明らかになった。その証左は次に示す通りである。

提示したものは、『史記』「衛康叔世家第七」の第1葉表であるが、欄外に認められるものが唐張守節の『史記正義』佚文であり、当該『史記正義』佚文は以下の如く、瀧川龜太郎博士の『史記会注考証』でも確認できるが、『史記会注考証』では、文字の判読が出来ない3箇所を空郭（□□□）としてある。

衛城，在衛州衛縣西二十里，本朝歌邑，殷都也，不□□□，康叔爲君居河淇間故商墟，即朝歌是也，故康城，在洛州陽翟縣西北三十里，洛陽記云，是少康之故邑



瀧川博士が『史記会注考証』の中で述べられているように、瀧川博士は東北帝国大学図書館狩野亨吉氏旧蔵の慶長寛永年間刊の古活字印本『史記』（狩野亨吉文庫には8行有界本と9行無界本の2種が有るが、この場合は前者を指す）古活字版を『史記正義』佚文の基準としたものの、此の本は改装時に料紙の天部もしくは地部の欄外に施されていた『史記正義』佚文の史料が削除したり、或いは『史記正義』佚文が抄写された貼紙が一部剝離して判読できない部分もあり、瀧川博士はこのような箇所に対して空郭を示す「□□□」の如き記号で示したのである。

ここに掲げた「衛康叔世家第七」の第1葉表に認められる『史記正義』佚文は、抄写された貼紙が一部剝離して判読できないケースであって、瀧川博士はこの削除された部分を翻刻の際に「不（※筆者註、実際は「下」字）」字以下の部分を□□□として空郭としたものである。

だが、『幻雲史記抄』には当該箇所に、「下文云」という文言が有り、手録の『史記正義佚存』にも同様の文言が有る。『史記会注考証』には、『史記正義』佚文に関してこのような空郭を設けた箇所が、「本紀」から「世家」まで散見することから、『史記正義佚存』を手録したのは「列伝」以降の編纂時ではなかったと解せられるのである。

当該『史記正義佚存』の書誌学的特徴は以下のとおりである。

2巻 瀧川博士手録 巻上のおもて表紙に「唐張守節史記正義佚存」と墨筆で標記。料紙は和紙にて縦28.0×17.3センチ。瀧川博士の墨筆あるいは朱筆標記および墨筆断句ならびに朱筆断句。天辺に東北帝国大学図書館狩野亨吉氏旧蔵の慶長寛永年間刊の古活字印本『史記』（八行有界本）の当該丁数箇所を標記。巻上は「本紀」「書」「世家」、巻下は「列伝」。巻下末葉に長澤規矩也氏の手識（しゅし）が有る。

当時、史記正義研究会は文部省から「総合研究 A」（「南化本史記の総合的研究」代表：水澤利忠）の科学研究費を受けていた。そこで「南化本史記の総合的研究」の一員だった尾崎康（慶應義塾大学ス道文庫教授）にお願いし、筆者および尾崎両人の立会の中、慶應義塾大学ス道文庫にて『史記正義佚存』2巻を撮影した。これは散佚防止のためであり、作成されたマイクロフィルムを上ス道文庫に寄贈するとともに、筆者は自費にてマイクロフィルムから印画紙に焼きつけてこれを複製本（見開き体裁ため B4 横版）とした。

その後、『史記正義佚存』原本は水澤が管理し、筆者は複製本を所持した。そして、筆者は複製本を底本として、『史記正義佚存訂補』（後述）を編集したのである。ちなみに『史記正義佚存訂補』は、水澤利忠編『史記正義の研究』（汲古書院、1994）では小沢賢二『史記正義佚存訂補』と題して付印されたが、『史記正義の研究』における「語彙索引」の対象となった『史記正義』は、『史記正義佚存訂補』所収の『史記正義』佚文をも含んでいる。

なお、『史記正義の研究』刊行直後に水澤博士から連絡があり、複製本の『史記正義佚存』を貸してほしいとの依頼があった。筆者は、水澤博士の求めに応じて複製本の『史記正義佚存』を水澤博士に手渡したのだが、後日これが文教大学の学生某の手に渡ってしまったとの情報を謡口明（文教大学教授）から得た。

そこで謡口明を通じて本人に返却を求めた結果、郵送にて複製本の『史記正義佚存』が

返送されてきたものの、水澤博士が管理していた原本の『史記正義佚存』はこのころ已に所在不明となっていたようである。

なぜならば、水澤博士は『史記正義の研究』刊行後に文教大学に対して自ら所蔵する書籍を一括寄贈したのだが、そのリストに原本の『史記正義佚存』は存在していないからである。

ところが縁あるかな。それから十数年が経って、筆者は某所にて原本の『史記正義佚存』2巻が所蔵されていることを知り、これを入手した。筆者は原本の『史記正義佚存』2巻を文教大学に寄贈すること考えたが、文教大学の水澤利忠文庫・池田英雄文庫・瀧川龜太郎文庫は、寄贈書籍の管理に不行届があることを複数の関係者から聞かされたので断念した。

そこで、謠口明のアドバイス等を受けた後、水澤利忠博士のご子息である史彦氏の快諾を得て、京都大学人文科学研究所に寄贈することとした。なお、その際筆者が所有していた複製本（B4 横版）からさらに一部複製本を作成し、一般利用者が閲覧できるようこれも併せ寄贈した。（南京師範大学客座教授）

追記：再校終了後に、熊本市内の古書肆に線装本仕立ての「史記総論」名の書物が売りに出されており、かつそこには瀧川資言の落款が押印されているとの情報を得た。「史記総論」は瀧川資言著『史記会注考証』巻10所収の末文に168頁に涉って設けられた一項であり、ここにくだんの「史記正義佚存」作成の経緯が記されていることは周知のとおりである。

古書肆に問い合わせたところ当該料紙は半紙版であり、そこに文字が鉛印されているということであったが、本日当該「史記総論」を購入したところ、実際はA 5 版（横150 mm×縦221 mm）の、四つめ綴じ仕立ての洋装本（本文は上質紙90珎メを使用）であった。

見返しに朱印白文で「瀧川／資言」および朱印朱文にて「君山小史」とある。後者朱文の印記は瀧川龜太郎旧蔵『教要解畧』（早稲田大学図書館蔵 請求記号：ハ07 02893）にもある。

当該「史記総論」は東方文化学院が公刊したA 5 版洋装本『史記会注考証』所収の抜刷と解せられ、書誌的特徴を確認した後、なるべく早く京都大学人文科学研究所に寄贈したいと考えている。（2014年 3 月15日、小澤賢二記）

附記：本稿は、小澤賢二氏が寄贈に際して執筆した論文「瀧川龜太郎博士手録『史記正義佚存』の発見とその史的背景」の第1章を、『史記正義佚存』の解題として抜粋したものである。省略部分を含む全文は、科学史研究室のHPにて公開する。

『唐張守節史記正義佚存』手稿之文獻價值（抄錄）

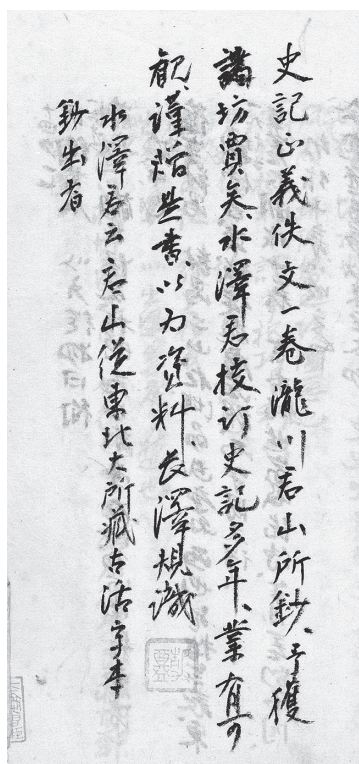
袁 傳璋

宋代以前的『史記』古注，摭史籍記載有20余種，歷經歲月篩汰，唯余學術價值最高的南朝劉宋裴駰的『史記集解』，李唐王朝司馬貞的『史記索隱』和張守節的『史記正義』，學界習稱『史記』三家注，經宋人合刻為『史記集解索隱正義』而流傳至今。『史記』三家注匯集了『史記』成書以來下迄盛唐八百余年間諸多學者的研究成果，合刻本又保存了東漢時形成的『史記』文本，遂成為『史記』研究史上第一座里程碑。『史記』作為正史之祖，三家注之後的歷代研究者留下專門著作或單篇零割的不下數百家。但直至20世紀初葉1100多年間，可惜無人能如裴駰，司馬貞，張守節那樣對『史記』全書作出新而全面的整理疏證。

瀧川資言博士窮20余年之功，於1933—1934年間出版『史記會注考證』10卷。該書起初以日本明治年間刊行的鳳文館本與博文館本『史記評林』為工作本，以後又改以當時所見校訂最為精善的清同治9年金陵書局梓行的『史記集解索隱正義合刻本』為底本，「正文以我邦（瑋按：指日本）所存鈔本校，『正義』以僧幻雲所錄補」^[1]。注文除保存刻本三家注的全部成果外，又廣蒐博采「禹域」（中國）上起盛唐開元劉知幾的『史通』，下迄民國初年梁啟超的『史記今義』，中間包括宋代的洪邁·鄭樵·王應麟，元代的馬端臨，明代的凌稚隆·胡應麟，清代的顧炎武·方苞·王鳴盛·錢大昕·梁玉繩·王念孫·張文虎·王先謙等學術大家關涉到『史記』的著作100余種，日本本土上起恩田仲任，下迄新城新藏，中間包括岡白駒·中井積德·僧瑞仙（桃源）·僧壽桂（幻雲）等著名漢學家的相關著作20余種，以事串聯，爬梳整理，弁析折中，然後取其精義，以考證的名目，分系於相應『史』文三家注之下。瀧川氏若遇疑難『史』文前人未曾解說或說而未明，而自己又有心得者，亦加以考弁注說。全書之末又附瀧川氏自撰之『史記總論』，就太史公事歷，史記資材，史記名稱，史記記事，史記體制，史記文章，史記殘欠，史記附益，史記流傳，史記鈔本刊本，史記集解索隱正義，史記正義佚存，司馬貞張守節事歷，引用書目舉要等「史記學」中重要事項，分列條目予以論述，亦足備為了解太史公其人其書的參考。其書問世以來一直成為海內外研習漢學者不可或欠的最佳『史記』讀本。

『史記會注考證』繼『史記』三家注之後，在保存『史記』三家注全部成果的基礎上，第二次對盛唐以下直至近世的歷代『史記』研究成果進行了全面的總結疏證，以資料最富，體例最精而樹立起『史記』研究史中又一座里程碑。唐貞觀中，顏師古『漢書注』成，時人稱「顏秘書為班孟堅忠臣」^[2]。『史記會注考證』出，愚以為瀧川資言當亦無愧「司馬子長忠臣」的品題。

『史記會注考證』的面世，離不了『唐張守節史記正義佚存』手稿的催生，誠如瀧川資言本人所言「予得『史記正義』遺佚於東北大學，始有纂述之志」^[3]。因此，若論『唐守節史

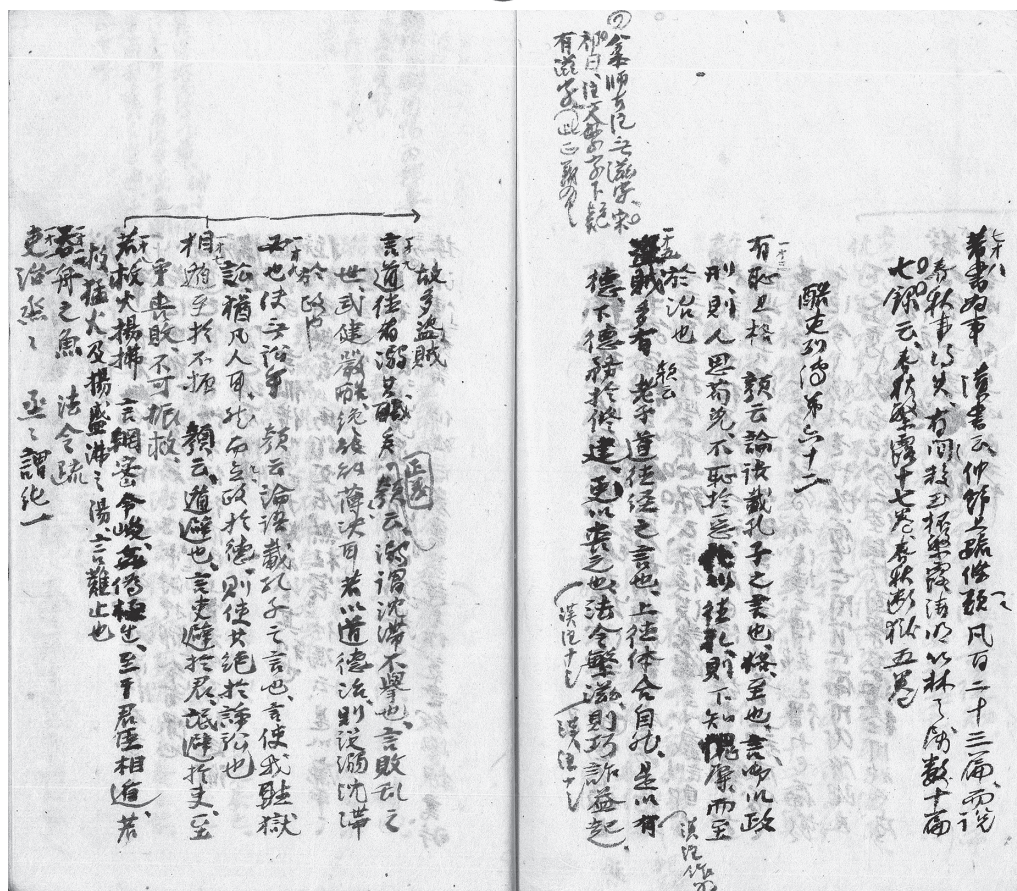


記正義佚存』の文献価値，則莫此為大。自然，『史記正義佚存』手稿尚有自身不可替代的文献價值。所錄『正義』佚文有助對『史』文的深理解自不待言，除此之外，尚有數端可圈可點。

首先，瀧川資言手輯『史記正義佚存』「略復張氏之旧」。張守節作為盛唐東宮屬官，職任諸王侍讀，有幸自青年時代起便得依東宮崇賢館『史記』，『漢書』名師門牆^[4]，并可檢閱東宮豐富藏書^[5]。「涉學三十余年，六籍九流地里蒼雅銳心觀採，評『史』『漢』詮衆訓積而作『正義』，郡國城邑委曲申明，古典幽微竊探其美，索理允愜，次旧書之旨，兼音解注，引致旁通，凡成三十卷，名曰『史記正義』」。（張守節：『史記正義序』）「正義」者，「伝以通經為義，義以必當為主。至當歸一，精義無二」^[6]之謂也。張守節以『正義』為所撰『史記』注命名，其自我期許已非淺。故北宋慶曆元年（1041）皇家藏書定著的『崇文總目』著錄稱唐張守節撰「『史記正義』三十卷。為『漢書』學者，此最精博」^[7]。但由于張守節與作『史記索隱』的

唐弘文館學士司馬貞生當同世，著書所引圖籍資材大抵相同，故2人之『史記』注文常有雷同之處。南宋合刻『史記』三家注時，以先已梓行的『史記集解索隱』為本注，而以『正義』為增注附刻其後。編刻者為減少重複，對附刻的『正義』刪削獨多。自『史記』三家注合刻本風行于世，單本『史記正義』漸次湮沒，明代士人已無緣復睹原本。瀧川資言的『史記會注考証』之所以備受重視，原因之一正是由於他拋手輯『史記正義佚存』為該書增補了因被『史記』三家注合刻者刪削而湮沒800余年的1000余條『正義』。

其次，『佚存』手稿保存的『史』文異字有助『史記』文本校勘。『史記』在長期流傳過程中，輾轉相鈔，各種鈔本形成「文句不同，有多有少，是非相質，真偽舛雜」^[8]的現象。雖經東晉徐廣「研核衆本，具列異同」，又經裴駰「以徐為本」，再加整理而成定本，但在北宋初年板刻『史記集解』前的手鈔階段，『史』文仍難免出現豕亥魯魚般的錯訛。張守節注『史記』主要依拋其師「張先生旧本」，而守節又以「精博」著稱，故佚文『正義』所保存的『史』文異字，大多優於三家注合刻本的今本，實有助於『史記』文本校勘，以期接近太史公『史記』原貌。如『外戚世家』「因欲奇兩女，乃奪金氏」。（中華本第6冊，1975頁）『佚存』手稿『正義』「奇」作「倚」，並於綺反。倚，依也。問卜筮，兩女當貴，乃依恃之，故奪金氏之女。按之『史記』上下文，佚『正義』作「倚」深契太史公原意，又與『漢書』作「倚」合。一「倚」字直探臧兒奪女的深心。『索隱』本作「奇」，注曰：「奇者，異之也。」顯然與欲恃「兩女」以獲大富大貴之父母私心不符。『史記』今本「奇」字當依『佚存』手稿『正義』佚文校正為「倚」。又如『李將軍列傳』「広家世世受射」。（中華本第9冊，第2867頁）今本「受」字，『佚存』手稿『正義』佚文作「愛」，全句為「広家世世愛射」。佚文釈「愛」云：「愛，好也，習也。」然則「受」耶「愛」耶，孰是孰非？且看太史公下文：「広訥口少言，与人居則画地为軍陳，射闊狭以飲。專以射為戲，竟死。」直是「愛射」的絕



妙注腳。挾太史公所敘李將軍秉性，『史記』原文以作「愛」為是，「受」則為「愛」字之形訛。又如『朝鮮列傳』「真番旁衆國。」（中華本第9冊，第2986頁）『佚存』手稿『正義』「衆」作「辰」，全句為「真番旁辰國。」佚『正義』除引『後漢書』「朝鮮有三韓：一曰馬韓，二曰辰韓，三曰弁韓」外，復引『魏志』及『括地志』佐証今本「衆國」為「辰國」。是「衆」乃「辰」之形譌。再如『酷吏列傳』「天水駱璧推咸。」（中華本第10冊，3154頁）漢無「推咸」刑名，而「推咸」又別無可解。『索隱』：「上音直追切，下音減。謂椎擊以成獄也。」司馬貞讀「推」為「椎」，「咸」為「減」，改字立說，強勉為解，實不足訓。而『佚存』手稿『正義』佚文作「推成」，積為「言推掠以成罪也。」不煩改字而文從義順。今本「咸」顯為「成」之形譌。

然而『佚存』手稿所存『史』文異字亦有欠妥者。如『楚世家』「膺擊韓魏。」（中華本第5冊，1731頁）佚『正義』「膺」作「鷹」。「鷹擊韓魏」，若從單句看，「鷹」自較「膺」佳。若聯系此句的上下文「秦為大鳥……左臂挾趙之西南，右臂傅楚鄢郢，膺擊韓魏，垂頭中國……」，則作「膺」者是，作「鷹」者非，且佚『正義』：「膺作鷹。如鷹鳥之擊也」，也與『史』文原義違戾。凡此均應仔細甄別。

第三，『佚存』手稿保存古佚書遺文可資史事考証。張守節注『史記』，憑藉東宮書府，征引浩博。挾『佚存』手稿所見，守節注地大都征引魏王李泰主編之『括地志』，挾其引文，得知某地地里方位，政區沿革，歷史故實，風土民俗。注書大都征引『漢書·藝文志』，阮孝緒『七錄』，挾其引文，得知某書作者誰何及目錄卷帙。挾其所引衛宏『詔定尚書序』，得

知古文『尚書』文多段借，實因潁川人朝錯奉詔赴齊地從伏生受讀，而兩地音讀有異，錯所不解者直以類音屬讀所致。又如『史記·魯周公世家』「成王与大夫朝服以開金縢書」，（中華本第5冊，1522頁）周公卒後雷風變異事，史公敘事前後錯繆，張守節佚『正義』征引三国蜀漢譙周『古史考』論金縢之文予以弁析，實有助古史疑案考證。還有佚『正義』引述過的『世本』，『竹書紀年』，『燕丹子』，陸賈『楚漢春秋』，『漢故事』，蔡邕『天文志』，張華『博物志』，『荊州圖考』等等，宋以後大都亡佚，由于『正義』的征引方得存其片段。即使是斷帛碎錦，于解讀『史記』其書，理解太史公其人均有所裨益。

第四，『佚存』手稿可校正瀧川本，校補本訛，奪，衍，倒的失誤，其價值往往勝過「一字千金」。『唐張守節史記正義佚存』手稿由瀧川資言獨力過錄自日本公私所藏『史記』宋元古板本，古活字印本（慶長，寬永本），鈔本校記，又摭所見多種板本，鈔本參互校訂，未經二手轉抄或手民排印，故最為完好地保存了所錄『正義』佚文的原始面貌。瀧川本，校補本存在的訛，奪，衍，倒之失誤，大都可摭『佚存』手稿訂正。本文第2節「對讀劄記」對此已多有討論。這裏再略舉數例予以闡析。

瀧川本『正義』佚文不可索解者，得『佚存』手稿訂正則如撥雲見日。如『廉頗藺相如列傳』「以數千人委之。」（中華本第8冊，2450頁）瀧川本『正義』佚文云「委之，反以少年先常以委。」意不可曉。而『佚存』手稿『正義』佚文作「委，之偽反。以少軍先嘗以委。」先為「委」字注音，然後為全句釋義，句意豁然明朗。于是知瀧川本「年」為「軍」之形訛，「常」為「嘗」之形譌。

瀧川本正義佚文敘次混亂不可卒讀者，得『佚存』手稿訂正，則敘次井然有序。如『魏公子列傳』「平原君負韃矢。」（中華本第7冊，2381頁）瀧川本此下佚正義敘次顛三倒四，與『史』文若無關聯。『佚存』手稿『正義』先節錄『集解』引出「呂忱」，然後補釋呂忱行歷及其著作『字林』，最後引『字林』釋「韃」文：「若胡鹿而短。」元元本本，正見守節非凡功力。

瀧川本有些形近而訛，如「自」訛「白」，「旻」訛「昊」，「洛」訛「路」之類，尚無大礙；有的形訛則使含義背反，甚至匪夷所思。如『孝景本紀』「殖蘭池。」（中華本第2冊，443頁）瀧川本佚文『正義』「『括地志』：蘭池陵，即秦之蘭池也。」而『佚存』手稿佚『正義』作：「蘭池陂，即秦之蘭池也。」瀧川本「陵」為「陂」之形訛。「陂」為沢，「陵」為山，瀧川本一字之訛，遂人為地變沢為山，含義不啻天壤之別。又如『孝文本紀』「發倉庾以振貧民。」（中華本第2冊，432頁）瀧川本此下佚文『正義』「『百官箴』者，庾所著書名。庾劭著『官儀次比』。」而『佚存』手稿佚『正義』作「『百官箴』者，庾所著書名，庾劭著『官儀』之比。」胡庾所著『百官箴』属于庾劭所著『官儀』之類。瀧川本訛『佚存』手稿之「之」字為「次」字，遂鬧出庾劭曾著『官儀次比』一書的笑話。

瀧川本，校補本所錄『正義』佚文的脫奪往往造成嚴重誤會，得『佚存』手稿方能澄清。如『孝文本紀』「天下人民未有嘆志。」（中華本第2冊，419頁）校補本於此下補『正義』佚文云「恨也，未有恩惠之志民也。」「未有恩惠之志民」，文句不通，且與文帝詔書原義不合，定有訛奪。『佚存』手稿佚『正義』作「未有恩惠之志於民」，則契合文帝自責之本意。校補本補『正義』奪一「於」字，則誤入匪淺。又如『吳太伯世家』「見舞『象箏』，『南籥』者。」（中華本第5冊，1453頁）此下校補本補『正義』曰「按：北方南舞曲也。」「北方南舞



曲」成何話說？按『佚存』手稿佚『正義』作「按，北方，南方舞曲也」，則渙然解疑。校補本奪一「方」字則使讀者茫然。再如『李斯列傳』「且少我哉？且固我哉？」（中華本第8冊，2558頁）校補本補『正義』曰：「言丞相幼少，且以我為故旧哉」。『史』文主体是秦二世皇帝胡亥，丞相指李斯。李斯時已高齡，何來「幼少」之說？其誤顯白。『佚存』手稿佚『正義』作：「言丞相幼少我。」二世意謂李斯欺我年齡幼少，佚文正符二世惱怒的心態。校補本奪『正義』原本中的「我」字，遂與『史』文原義背戾。再如『袁盎晁錯列傳』「夫一旦有急叩門，不以親為解。」（中華本第8冊，2744頁）瀧川本佚『正義』「言人有急叩門被呼，則依父母自解說也。」意謂面對有急求助者，以父母為托辭而拒人於門外。其猥瑣平庸之態令人齒冷。這絕非袁盎盛譽為「天下所望」的雒陽劇孟之為人。瀧川本佚文必有錯訛。考『佚存』手稿佚『正義』作：「言人有急叩門被呼，不依父母為解免也。」古道熱腸之俠士形象立現人前。瀧川本奪一「不」字，則使劇孟無端蒙羞；補一「不」字，則煥發劇孟俠義風彩。「一字千金」，此之謂也。

由于瀧川本與校補本新增『正義』佚文大量存在訛，奪，衍，倒的失誤，瀧川資言先生「略復張氏之旧」的願望不僅未能完好的實現，而且還招致對『史記會注考証』的誤會，更使『史記正義』的作者張守節蒙受不白之冤。筆者期望『史記會注考証』的出版者日本東方文化學院及『史記會注考証校補』刊行會挾機依挾『唐張守節史記正義佚存』手稿，對『史記會注考証』及『史記會注考証校補』新增『正義』佚文進行全面校訂，重新推出『史記會注考証』校正版，以真正實現瀧川資言先生生前「略復張氏之旧」的夙願，並滿足海內外研讀『史記會注考証』者能有一個更完美文本的期望。

正如筆者在「引言」中所言，對『唐張守節史記正義佚存』手稿的專題研究尚未開始。本文作為拋磚引玉之作，希望能充當一片墊路的燕石，以期引發海內外『史記』研究者對這一重要課題的重視。

今年，公元2013年，適逢瀧川資言先生於東北大學藏書中發現湮沒800余年的『史記正義』佚文「一千二三百條」，手輯以為『史記正義佚存』2卷，遂啟『史記會注考証』「纂述之志」100周年。謹以此小文作為對『史記』研究史中這一勝事的紀念，並對瀧川資言先生辛勤的耕耘表示由衷的敬意！（安徽師範大學教授）

注：

- [1] 瀧川資言『史記會注考証』卷10，史論總論·史記鈔本刊本，136頁。
- [2] 歐陽修等『新唐書』卷198，儒學上·顏師古傳，中華書局點校本，第18冊，5642頁。
- [3] 瀧川資言「書史記會注考証後」，『史記會注考証』第10冊卷末。
- [4] 唐代東宮學館講授『史記』『漢書』由來有自。高宗龍朔中，劉伯莊以弘文館學士，國子博士，兼授崇賢館學士，撰『史記音義』『史記地名』『漢書音義』各二十卷，行于世。見『旧唐書』儒林傳上。崇文館學士張嘉會獨善『史記』，司馬貞曾「少從張學」，見「史記索隱後序」；而張守節在『正義』中多次稱道「張先生」，「張先生書」，可証張守節亦師從張嘉會受『史』『漢』。東宮學館為諸王講授『史記』等「三史」，其制亦傳於東瀛。當唐肅宗時，日本已有其制。
- [5] 安史之亂前，唐東宮崇賢館典藏極富。開元間褚無量校內府書，玄宗曾詔無量借崇賢館藏書鈔寫以補充內府書。東宮又有司經局，掌「四庫圖籍繕寫刊輯之事」。
- [6] 唐玄宗『孝經序』，阮元刻『十三經注疏』，中華書局縮印本，下冊，2540頁，1980年10月第1版。
- [7] 王堯臣等奉勅撰『崇文總目』12（『永樂大典』本）卷3，正史類，『文淵閣四庫全書』史部，目



録類 1 所収。

[8] 裴駰『史記集解』序，中華書局点校本『史記』第10冊，卷末第3頁。

附記：本稿は，小澤賢二氏の仲介で袁傳璋に特別に寄稿してもらった論考「『唐張守節史記正義佚存』手稿之文献価値」の第3章を抄録したものである。省略部分を含む全文は，科学史研究室のHPにて公開する。なお，論文の末尾には「壬辰年臘月初五（2013年元月16日）起筆，癸巳年二月初五（2013年3月16日）完稿於蕪湖赭麓窰陶斎とある。

センター研究年報2013
特集 科学史研究室所蔵資料データベース（武田時昌編）

発行日 2014年3月25日

発行所 京都大学人文科学研究所附属
東アジア人文情報学研究センター

〒606-8265 京都市左京区北白川東小倉町47

電話 075-753-6997 FAX 075-753-6999

<http://www.kita.zinbun.kyoto-u.ac.jp/>

印刷所 共同印刷工業株式会社

